

爵夫人の夜會で作つたと云ふ、即興詩を、持ち前のゆつくりした鼻聲で讀んで聞かせる事はありました。妾は其の詩の初めの二行だけ覚えてゐます……露西亞人と佛蘭西人の比較に關したものです。

L' aigle se plait aux régions austères

Ou le ramier ne saurait habiter……

『司令官さん』はこれを聞くと何時も、「サン・オレルにも劣りませんよ！」と云つて褒めました。

イワン・マトウエイツチは死ぬる時まで若々しく見えました。頬は薔薇色で、齒並は白く、眉毛は濃くてはつきりしてゐて、愉快らしい印象的な澄んだ黒い眼はまるで瑠璃の様でした。彼は物事によく解つた人で何んな人に對しても、召使に對してさへ非常に親切でした……だのに、あゝ！ 妾は彼と共に在る時何んなに悲しく、彼と別れる時何んなに喜んだでせう！ 彼の前で妾は何んなに悪い事を考へてゐたでせう！ あゝ、その咎は妾にあるのぢやないのです……斯んなになつた咎は妾にあるのぢやないのです……

ラツチは結婚すると同時に大きい家からあまり離れてゐない一つの家を賣つてがはれました。で妾は母と一緒に其の家に住みましたが、其の家の暮しは面白くない暮しでした。間もなく母は妾が敵と呼んでも敵と考へてもいゝ、ウイクトル、あのウイクトルを生みました。母は元來體の弱い方だつたの

ですがウイクトルを生んでからは最う元の健康には歸れなくなりました。ラツチは今の様に機嫌好さうな風をしてゐることは滅多になく、何時も難かしさうな顔をして、忙しさうによく働いてゐました。妾に對しては慘酷で亂暴でした。妾はイワン・マトウエイツチの前を去る時にも助かつたやうに思ひましたが、自分の家も出ることが出来るなら出たいと思つてゐました……妾は子供の時から不幸だつたのですね！ 何處に錨を卸すと云ふ希望もなく漂はされ岸から岸に打上げられてゐたのです！ 妾はよく冬の深い雪の中を薄いフロツクを着たなりで大きい家の方に行つてイワン・マトウエイツチに本を讀んでやりに行きました、それが面白いことででもあるやうに……けれども大きい面白くない部屋や、花やかな色をした家具や、絹の綿入のジャケットに白の裝飾と襟飾をして、レースの裝縁を指の邊まで垂れて後ろに梳き上げた髪にお白粉（彼の召使がそう云つてゐた）を散らしたやうな丁寧で温か味のない老人を見るた、妾は琥珀の匂に鼻が詰まつて、氣が滅入るやうに感じました。イワン・マトウエイツチは何時も大きい低い様子に腰掛けてゐましたが、其の後ろの壁に懸けた類には、寶石や金剛石をちりばめた派手なヘブライの着物を着て明るい大膽な表情を顔に浮かべた、若き女の肖像が描いてありました……妾はよくこの肖像を窺つと見上げたものです。この肖像が妾の母の肖像でイワン・マトウエイツチの頼みによつて母の父、描いたのだと云ふことはずつと後になつて知りました。

本當に母はあの頃とはすつかり變つてしまひました！ イワン・マトウエイツチが、母を打潰してしまつたのです！ 妾は考へました、「母はあの老人を愛してゐるのだらうか！ あんな人を愛するなんて、そんな事があるものか！」と。けれども後から母の眼つきや、半分口に出しかけた言葉や、不用意な身振のあるものなどを考へてみますと……「さうだ、あの人を愛してゐたのだ！」と思はず、ぞつと身顫ひすることがあります。あゝ、神よ、他の人々はこんな感情を味はささせないで下さい！ 妾は毎日イワン・マトウエイツチに本を読んで遣りました。時によると、三四時間續けて讀むこともありましたが……こんな長い間、こんなに大きな聲を出して讀むのは體の爲にはよくありません。醫者は妾の肺を心配し、ある時などはイワン・マトウエイツチに其の事を忠告したほどです。けれども老人は唯微笑して——いや、彼は口をすぼめるだけで微笑は決してしないで——かう云ひました

Vous ne savez pas ce qu'il y a de ressources dans cette jeunesse. すると醫者は、「だつて昔『司令官さん』は……」と云ひました。イワン・マトウエイツチは相變らず微笑を浮べながら、「*Vous rêvez non cher, le commandeur n'a plus de dents, et il crache à chaque mot Z'aimé les voix jeunes.*」と云ひました。

かうして妾は朝晩の咳が大變苦しかつたに拘らず、本を讀み續けました……イワン・マトウエイツ

チは時々妾にピアノを弾かせました。然し音楽を聞くと何時も彼の神経は眠むくなるので、直ぐ眼を閉じて、こくり／＼頭を振りはじめ、たゞ時々珍らしいことに、「そりやシユタイベルトだらう！ シユタイベルトを聞かしてくれ！」と云ふ位のものでした。イワン・マトウエイツチはシユタイベルトを「獨逸の粗野な鈍重」から抜き出た大天才だと褒め、たゞ「あまり感情的！ あまり想像的！」なところが缺點だと云つてゐました……イワン・マトウエイツチは妾が弾き勞れたのを見ると、何時でも「ポローニユのカシユ」を呉れました。かうして月日は一日一日とたつて行きました……

ところが或る晩——何うして其の晩を忘れませう！——怖ろしい災難が妾を襲ひました。母が不意に死んだのです。妾はまだやつと十五でした。まあ何んなに悲しかつたでせう！ 何んなに慘酷な狂暴な力を感じたでせう！ 生れて初め、死と云ふものに面して何んなに怖れたでせう！ 妾の可愛さうなお母様！ 妾たち二人は本當に不思議な關係で深く愛し合つてゐました……深く、堪らないほど愛し合つてゐました。二人は共通の秘密を胸の底に抱きながら固く沈黙を守つて、それをお互に大切に隠し合つてゐたのです。母の全體が黙つた不幸そのものでした。妾に向つて口に出しては、何の不幸も云はないばかりか、昔の若かつた頃の事を語つて聞かせることもありませんでした。妾たち二人は眞面目な話は一切避けてゐたのです。妾は何時かは母が胸を擴げ、自分も自分の思ふ事を口に出し

て最つと自由になる時が来るだらうと、始終そればかり待つてゐたのですが、あゝ！……日ごとく、の忙しさや、母の思ひ切りの悪い、しりこみ勝ちの性質や、病氣や、ラッチのあることや、それに何よりも「そんな事を話して何にかる？」と云ふ永遠の疑問や、それから断を間なく過ぎ行く時と生命の流れの爲に……何もかも雷に打たれたやうにお終ひになつてしまいました。そして妾たちの秘密の重荷を軽くする言葉はもとより——臨終の別れの言葉さへ母の口から聞かれないのが妾の運命だつたのです！ たゞ覺えてゐますのは、「スザンナ・イワノウチ、お母様がお前の爲にお祈りをなさるから、早くお行き！」と云つたラッチの言葉、重い布團の下から伸ばした蒼白い手、苦しうな息づかひ、死にかゝつた眼……おゝ、もう澤山！ もう澤山！

其の翌日及び葬式の日、妾は何と云ふ怖れ、何と云ふ忿怒を以つて父の顔を見たでせう！ 何と云ふ憐憫の混つた好奇心を以つて父の顔を見たでせう……左様、父の顔を！ 母が死んだ後で妾は母の文箱の中に彼の手紙があるのを見ました。少しは蒼くなつて心配してゐるかと思ひましたが……なかに！ この石の様な心を持つた人は何とも思つてはゐないのです！ 一週間の後には今までと同じ調子で妾を自分の部屋に呼び、今までと少しも違はぬ聲で「Si vous le voulez bien les (les variations sur l'histoire de Psauce d. Moby, a la page 4 …… a on nous avons été interrompus.)」と云ふのです。

それどころか母の肖像を他に持つて行かせもしないのです。それで、妾を歸す時には傍に寄らせて二度ばかり手を接吻させて、「Inzanne, la mart de vole mère vous a privée de votre appui naturel, mais vous pourrez toujours compter sur ma protection.」と云つてくれました。けれども、また肩を軽く押して、何時もの癖で口の両端を尖らして、「a ez mon enfant.」と云ひました。妾はまああなたは妾の父だと云ふことをよく知つてゐますね！」と云つてやり度かつたのですが、何も云はずに部屋を出ました。

其の翌日妾は朝早く墓に参りました。花や青葉の美しい五月でした。妾は長い／＼間新しい墓の傍を離れませんでした。妾は泣きもせねば、悲しみもしませんでした。頭を瀧たしてゐる唯一つの考へは、「お母様、解りますか、あの人が今度は妾を保護してやらうと云ふのですよ！」と云ふ言葉でしたが、妾が斯う考へながら微笑しても、その微笑が何だか母の心を傷つけるやうな気がしてなりませんでした。

時としては自分は何うして斯んなに執拗くイワン・マトウエイツチから告白——いや、少なくともたつた一言の温い言葉を與へてもらいたがるだらうと、それを不思議に思ふこともありましたが、彼が何んな人であるかもよく知つて居り、また人間の「父」といふものは斯んなものであらうと妾が夢に描い

た、父と彼とすつかり違つてゐるのもよく知つてゐるのに、何うして妾は温い言葉を彼から與へてもらひ度がるのでせう？……妾は寂しかつたのです、地上にたつた一人で、寂し／＼て堪らなかつたのです！ それからまた次の様な疑問が起つて始終妾を悩ませるのでした、「母はあの人を愛してゐなかつたのか知ら？ 屹度、少しは愛してゐたに違ひないのか知ら？」

それから三年以上もたちました。妾たちの單調な生活には何の變化もありませんでした。ウイクトルも最う少年になりました。ウイクトルより妾の方が八つ大きいのですから、世話をしてやつてもいゝのですが、ラツチはそれに反對し乳母をつけ、その乳母に厳しく云ひつけて子供が甘える様になつてはならぬからと云つて、妾を近よらせませんでした。ウイキル自身も妾を嫌ひました。或る日ラツチが慌たゞしく興奮し、腹を立てながら妾の部屋に参りました。其の前の晩妾は養父に就いて面白くない噂を聞いてゐました。少なからぬ金を使込んだり商人から賄賂を取つたりしたので捕まへられたと召使が話してゐたのを聞いてゐたのです。

「お前助けてくれ、と彼がいら／＼卓子の上を指で叩きつゝ云ひました、「早くイワン・マトウエイツチの處に行つて私の爲に云ひわけしてくれ。」

「云ひわけを？ 何うして？ 何うしたんです？」

「中に這入つてくれ……まんざらの他人ぢやないぢやないか……私が咎められたんだ……私もお前も麵麩さへ食へなくなるかも知れないんだ。」

「だつて何うして妾が行くんです？ 何うしてあの人邪魔をするんです？」

「なんだ！ お前には邪魔が出来る『譯』があるんだよ！」

「何んな譯、イワン・デミアンニツチ？」

「何を云ふんだ……あの人はお前の云ふ事を聞かねばならぬ譯がいろ／＼あるんだよ。お前はそれが解らぬと云ふのか？」

彼は荒々しく妾を睨みました。妾の頬は燃えるやうに火照りました。憎悪と輕蔑の念がむら／＼と胸に湧き上つて渦を巻きました。

「いえ、解りました、イワン・デミアニツチ、」と答へましたが自分にも、自分の聲が妙に聞こえました。「解りましたからイワン・マトウエイツチの處に行つて頼まないのです。麵麩なんか食べないでもよろしい！」

ラツチは齒ぎしりをして手を握り締め、

「よし、解つた、覺えてゐろ！ と激溜れ聲で呟いて身顫ひしました。

其の事があつた日、イワン・マトウエイツチは彼を呼び寄せて、曾てラ・ロッシュフコー公爵と交換したと云ふ杖を振つて、「この不埒な、ゆすり奴！ 出て行け！」と叱つたさうです。イワン・マトウエイツチは露西亞語がちつとも解らないのです。そして露西亞語の「野卑な無駄言」を輕蔑してゐました。或る人が曾てイワン・デミアニツチの前で、「その同じものが獨りで解りました。」と云つたら彼は大層怒つてしまつて、それからと云ふものは露西亞語の無意味と無茶な例として何時もこの句を引き合ひに出して、「その同じものが獨りで解りましたとは何のことだ？」と一語一語に力を入れて露西亞語で云ひました。「何故同じものだ、獨りでだのと云つて、それが解りましたと云はないのだ？」

けれどもイワン・マトウエイツチはラツチを追出しもしなければ、其の位置を奪ひもしませんでした。然し妾の養父は「覚えてゐる」と妾に云つたやうに何時までも其の事を腹に持つてゐました。

イワン・マトウエイツチは次第に變つて來ました。元氣がなくなつて、沈み勝ちで、健康も悪くなつて來ました。生々として蒼薇色だつた顔は黄色になつて皺がよつて、前の方は齒も無くなりました。外に出ることもすつかり止めてしまひ、僧侶の手を借りずに自分の家で百姓たちの爲に開いた接待日も止めてしまひました。接待日には何時でも彼は蒼薇の花を胸の釦の穴に挿して廣間や露臺の百姓たちのゐる處に出て、ウオトカの銀の杯に唇を當て、斯んな演説をやりました。「君たちは私の遣り方に

満足してくれるし、私も君たちの熱心に満足してゐて、こんなに喜しいことはない。私たちは皆んな兄弟なんだ。生れは同じなんだ。私は君たちの健康の爲に飲むよ！」彼は一同にお辭儀をし、一同も彼にお辭儀をしました。百姓は腰から上を屈めるだけで、他に跪くやうなことはありません、そんな事は禁じられてゐたからです。百姓たちは前の如く喜んで向へられました。イワン・マトウエイツチは最う姿を見せません。妾が本を讀んでゐると、「Da machine se t' tranquet. Ce'a se g' tel!」と云つて遮ることもありません。あの輝やかなしい石の様な眼でさへ、次第に霞んで來て何だか小さい様に見えるやうに變つたところは見えませんでした。だがたゞ婦人に對する禮を一層重んじだして、妾が這入ると苦しきやうにはありますが何んな時でも椅子から立上らなかつたことはありませんでした。妾の肩の下を支へて扉の處まで導いてくれ、ストーゾンと呼ぶ代りに時には「愛する嬢」と云つたり、時には「私のアンチゴーネ」と云つたりしました。「司令官さん」は母より二年遅れて死にましたが、彼の死は一層深くイワン・マトウエイツチを落膽させました。同じ時代の人が、ゐなくなつたことが彼を悲しませたのです。晩年の「司令官さん」の役目はたゞイワン・マトウエイツチとラツチが玉突をする時に、突きそこなつた度に「Bienjou, mal n'ustit!」と云ふぐらひなものでした。けれども食事の時などイ

ワン・マトウエイツチが、「N'est ce pas M. le Bonnardeur, c'est Montaigne qui a dit ce'a d ns ses Ictes P. san s'」などと訊ねることがあると彼は汁を匙から着物の下にこぼしながらも仔細らしい句調で「Ah, Monsieur de Montesquieu? An grand écrivain, moussi ur, un grand écrivain!」と答へるのでした。たゞ一度、イワン・マトウエイツチが、「Je t'ophiant' ropes ont eu dourtant du bon!」と云つた時にはこの老人も興奮した調子で「monsieur le Kolortouskoi! (彼は二十年も稽古をしてもまだ自分の恩人の名が、正確に發音出来ないのです) Deur fou tateur, l'ingigateur de cette secte, ce Da Reveillère De: eaux était un bonnet r uge!」と云ひました。するとイワン・マトウエイツチは微笑しながら嗅煙草をきかちめて、「Non, non, des fleurs, des jeunes vierges, le culte de la Nature ils ca du bon, ils out eu bon!」……妾は何時もイワン・マトウエイツチの智識の博いこと、その智識の役に立たないのを驚いてゐました。

イワン・マトウエイツチは目に見えて弱くなつて來ましたが、それでも元氣のいゝ顔をしてゐました。或る日、死ぬる三週間前に食後烈しい眩暈に襲はれて、頼りに考へ込みながら、「最う駄目だ」と云つて溜息をつきながら二十年も音信不通であつた唯一人の後繼者のペテルブルグにゐる弟に手紙を書きました。イワン・マトウエイツチが悪いと聞いて隣に住む正教信者の獨逸人で曾ては評判のいゝ

醫者であつたが今は田舎に隠居してゐる人が見舞ひに來てくれました。この人は滅多に妾方に來ないのですが、來ると何時もイワン・マトウエイツチに丁寧に取扱はれ、實際尊敬されてゐた人でした。彼が世の中で尊敬してゐたのは、この人だけだと云つてもいゝぐらひです。この老人がイワン・マトウエイツチに坊さんを呼ぶ様にすゝめますと、イワン・マトウエイツチは「ces messieurs et moi, nous n'avons rien à nous dire!」と云つて話を紛らしてしまひ、其の人が歸ると最うこれからは決してお客を通さぬやうにと召使に云ひ聞かせました。

それから彼は妾を呼びに寄越しました。彼を見た時には妾も驚きました。眼の下には青い斑点があつて顔もひきつけてゐて頭が力なく垂れてゐます。彼は強ひて笑顔を作りながら、苦しうに云ひました。(妾は其の時十九でした)「Vous v'îz grande, Suzor, vous allez peut-être bientôt sester seule, Soyez toujours sage et vertueuse. b'est la dernière recommandation d'un!」——咳をいふ——「d'un vieillard qui vous veut du bien. Ne vous ai recommandé à mon frère elje ne doute pas qu'il ne respecte mes volontés....」此處でまた咳をして漏々しげに胸を撫でました。「Du rest, j'espère encore pouvoir faire quelque chose pour vous dans mon testament!」この最後の文句がナイフの様に妾の胸を刺しました。あゝ、それはあんまり……あんまり人を侮辱した言葉です! イワン・マトウエイツ

子は妾の顔色を見て此の憤怒の感情を他の感情——悲しみか満足の感情とでも思つたのでせう。有るやうに妾の肩を叩いて、それから例の如く靜かに妾を押遣つて、「Vogons, mon enfant, pu'cousage! Nous sommes tous mortels! Et puis il n'y a pas encore de danger. B, n'est pu'une précaution que j'ai cru devoir prendre allez!」と云ひました。

妾は何時か母が死んだ時に彼の處に叫ばれた時の様に、「だつて妾はあなたの娘ぢやありませんか、あなたの娘ぢやありませんか!」と云つて遣りたかつたのですが、然し若しそんな事を云つてみた處で彼はこの妾の心から出る叫びの中に権利や財産を要求する妾の希望より他に何も認めなかつたでせう……いや、この人に一口も云つてはならない、こんな母の名を一度さへ口に出したことの無い人、妾を何とも思はないで、妾が父の事を考へてゐるが何うかそんな事さへ知らうとしないやうなやうな人には一口も云つてはならない! 或は彼も妾が父の事を知つてゐるのを、感ずいてゐたかも知れない。知つてゐたかも知れない。けれどもたゞ「埃を立てない」彼の好きな文句で彼の度々用ひた唯一つの露西亞風の言ひ方です) ために、若々しい聲を持つ都合のいゝ讀手を失なはんことを恐れたために、隠してゐたのかも知れません! 妾の母を苦しめたやうに妾も苦しめるが……! 二つの罪惡の背負つて墓に行くが……! 妾は人間の耳に甘い尊い響きを與へる或る言葉を決して……妾の口から

彼に聞かせまいと決心しました! 妾は決して彼を父とは呼ぶまいと決心しました! 母の爲にも自分の爲にも決して許すことは出来ないと思ひました! 彼はその許し、その名を欲しいとは思はなかつたでせうか……何で欲しくないことがありますものか! そんなことがありますものか! でも許すことは出来ない、出来ない、出来るものか!

この誓ひを守らせる物だつたのが、妾の心を軟らげない爲だつたのか、それとも妾の内氣や羞恥や自負を保たせる爲だつたのか、其れは解りませんが……兎に角イワン・マトウエイツチには母と同じ様な事が起つて、死が不意にやつて来て、而もそれが母と同じ様に夜でした。妾を起して呉れたのは今度もラツチで、妾は取る物も取りあへず彼に連いて大きい家のイワン・マーウエイツチの寢室に駆けつけました……けれども母が死ぬ時、妾に生々した印象を刻みつけたあの死に際の身振は見られませんでした。萎びたどす黒い人形が鋭い鼻と灰色の縮れた眉毛を……刺繍のあるレースで縁を取つた枕の上に横たわつてゐます……妾は怖ろしさ、嫌やらしさに叫び聲を上げて飛び出したのですが入口の處でルバーシユカを着て安息日の赤い帯を結んだ髻のある百姓にぶつかつてはじめて何故かは知りませんが新しい息を吸つた様な氣がしました……

後で聞いた話なんですが、消魂く呼鈴が鳴るので召使が寢室に駈附けてみますと、其時イワン・マ

トロウエイツチは寢臺の上にはゐないで其處から二三歩はなれた處にゐたさうです。そして床の上に着くまづたまゝ二度つゞけて、「やあ、お婆さん、いゝ安息日だよ！」と云つて、これが最後の言葉だつたさうです。けれどもこれは妾には信じられません。そんな場合に彼が露西亞語を話し、而も純粹の露西亞の熟語をす話なんて！

それからまる二週間の間妾たち一同は新らしい主人のセミオン・マウエイツチ・コルトフスキーを待ちました。彼は手紙で自分が行くまでは何にも手を觸れてはならぬ、誰をも解雇してはならぬと云ひ付けましたので、總ての扉、總ての家具や抽斗や、卓子、總てのものを封印して待ちました。召使は皆んな打沈んでびく／＼怖ろしがつてゐました。そして妾は急に家中で、一番重要な人物になりました。今までは「お嬢様」と呼ばれてゐましたが今度はそれが新しい意味を持つ様になり、妙に力を入れて發音される様になりました、そしてこんな噂も小さい聲で囁かれました、「老い旦那はあんまり急になくなられたので坊さんと呼んで来る暇さへなかつたが、本當にあの方は長い間懺悔をしられなかつた。しかし遺言をするには手間がとれないんだから。」

ラツチも考へて自分の行動を變へて來ました。お人好しの様な親切らしい風をしても駄目と思つたものか、忍従を表はした造い顔をする様になり、それが「いゝか己れは堪へてゐるのだよ」と云つて

ゐるやうに見えました。誰も彼も妾に尊敬の念を表はし、妾の機嫌を取らうとしました……けれども妾の方では何うしていゝのがさつぱり判らず、皆んなが自分の心持を知つてくれないのを驚くばかりでした。聽てセミオン・マウエイツチが參りました。

セミオン・マウエイツチはイワン・マウエイツチより十若く、其の生涯も兄とはすつかり變つてゐました。彼はベテルブルグの或る重要な位置を占めた官吏でした……結婚したのですが早くから嫁夫になり、一人の息子と一緒に暮らしてゐました。顔立は兄によく似てゐますが、背は兄よりも低く横に太くて、頭は圓くて禿げてゐて、イワン・マウエイツチと同じ輝かしい黒い眼を持つてゐましたが、たゞそれが飛び出てゐて、唇も厚くて赤うございました。彼は兄の事を死後も佛蘭西の哲學者だと叫んだり時には憶面もなく變人だなどと呼んでゐましたが、其の兄と違つて彼は大抵の場合何時も露西亞語を大聲で流暢に話しました。そして何時もよく笑つたものですが、其の笑ふ時には眼を細くしてまるで怒つてゐる時の様に體を嫌らしく振はせました。そして物事がなか／＼几帳面で、何んな事でも自分が當つてみて、報告などでも一々詳しく聞きました。彼が來ると早々其の日に聖水の式を行はせ、部屋と云ふ部屋は元より、屋根裏から地下室に至るまで水を振蒔かせて彼の言葉で云ふ、「ウオルテイルやジャコピンの精神、」を根本的に追出してしまつたのです。始めの一週間の中にイ

ワン・マトウエイツチに愛されてゐた五六人の者は殖民地に追ひ遣られたり、體刑を加へられたり、年の寄つた給仕——この人は佛蘭西語を知つた土耳其人で死んだ元帥カメンスキーからイワン・マトウエイツチから送られた人で——は自由な身となりましたが「他の見せしめ」といふので二十四時間以内に立退かねばなりませんでした。セミオン・マトウエイツチが酷い主人だことが解りましたので、皆んな前の主人を惜しんだやうでした。

老害れた料理番は愚痴をこぼしました。「前のイワン・マトウエイツチの時代には、私たちの面倒はたどりネンを綺麗に洗濯して置くこと、部屋の内がいゝ匂ひのするやうにしてをくこと、それから通り道で召使の聲が聞こえないやうにすること……これだけは八釜しかつた！ ですが他の事はちつともお構ひなしでした！ 前の御主人様は蠅一匹殺すやうなことはなさらなかつた！ あゝ、今度は難かしふまりました！ 最う死ぬる時が來たんですわ！」

家の中に於ける妾の位置も變つて來ました。數日間妾が自分の意志に反した待偶を受けた、位置ががらりと變りました……イワン・マトウエイツチの書いた物の中には遺言らしいものは何も見出されず、妾の利益になるやうなことは二行も書いてなかつたのです。急に皆んなが妾を避けるやうになりました……ラツチの事を話してゐるのぢやありませんよ……皆んなが妾に腹を立て、妾が嘔しでも

したやうに怒つた様な風をみせるのでした。

或る日曜のこと、彼が何時でも出席する朝の祈禱がすんだ後に、セミオン・マトウエイツチが、妾を呼びました。其の時まで妾は彼を此處彼處でちよい／＼見受けたばかり、彼の方でも妾に別に注意を拂つてゐる風はなかつたのです。彼は書齋の窓際に立つて妾を迎へました。二つの星の附いた官吏の制服を着てゐました。妾は屏のそばに立ちましたが恐怖と、何だか幽かな壓迫に胸は烈しく動悸打ちました。「お前を呼んだのは實は、」とセミオン・マトウエイツチは初めには妾の足許に眼を注ぎ、それから急に妾の顔に眼を注ぎながら云ひました。彼に見られた時には冷やつとしました。「お前を呼んだのは、實は私の決心を話して、私がお前を何くれとなく世話をしてやらうと思つてゐることが知らしてやり度いからだ。」それから一段と聲を高くして、「無論お前には何の權利もないのだ、然し私の兄の讀手として……私の心に頼るのならちつとも差支へないことだ。私は……無論お前の考へなり意見なりは信用してゐる。お前の養父のラツチにもよくお前の事を頼んで置いた。それにまたお前の器量がいゝのもお前の心がいゝ證據だと思つてゐる。」かう云つてセミオン・マトウエイツチはちよつと笑ひました。妾は……妾は腹が立ちはしませんでした……急に自分で自分が可愛さうになつて來ました……そして同時に自分と云ふものがこの世の中で何んなに孤獨で頼り度がなく、淋しいものである

かと云ふことをしみじみ感じました。セミオン・マトウエイツチは短かいしつかりした足つきで卓子の方につか／＼歩み寄つて、抽斗の中から卷いた紙を取出して、「自分の小遣ひとてこれだけ上げるこれからも心配はして上げるが、今日はこれで歸つてよろしい。いゝ女になるんだよ。」妾は機械的にそれを受取りました。其の時は出された物は何でも受取つたでせう。そして自分の部屋に歸つた寢床に腰をかけて長い間心ゆくばかり泣きました。自分ではそのお金を床に落した事と氣が附かすにゐたのですが、ラツチが其れを見つけて拾つて、こんなものを何にするんだと云つて自分が取つてしまひました。

丁度この時分ラツチの運命もよほど變つて來ました。セミオン・マトウエイツチとは二三度話をしたばかりで、非常に折合ひがよくなつて、暫くすると執事長になつてしまひました。それから彼の愉快な、永遠の笑ひの時代が始まつたのです。笑ふのは始めは主人の機嫌を取る爲だつたのですが……それが終ひには習慣になつてしまつたのです。彼が露西亞の愛國者になつたのも其の頃の事でした。セミオン・マトウエイツチは何でも露西亞の物が好きで、自分で自分を「露西亞の熊」だと云つて、自分でも着てゐる歐羅巴の服を嘲笑してゐました。そしてイワン・マトウエイツチが澤山の金を使つて仕込んだ料理人を、鳥の臟物を潰物にする術さへ知らぬと云つて遠くの村に追ひ出してしまひました。

セミオン・マトウエイツチは、祭壇には何時も立つやうに勤め、役僧と一緒になつて歌も歌へば、合唱の百姓娘たちが集まつて歌つたり踊つたりする時にも一緒になつて歌ひ、足で拍子を取つたり、娘たちの頬を抓つたりしたものです……然し間もなく彼は全財産を全く養父に任してペテルブルグに行つてしまひました。

妾のために悲しい日が始まりました……たつた一つの慰めは音楽で、妾は一生懸命になつてそれを稽古しました。幸ラツチは何時も忙しかつたのですが、暇さへあれば何時か云つた、「覚えてゐろ」の言葉通り妾に敵意を示すことを忘れませんでした。そして妾を苛め抜いて、セミオン・マトウエイツチに出す長い出鱈目の報告を寫さしてその綴方の誤りを直させたりしました。絶對的に服従しなければならぬので、妾も彼の云ふ事は何もかも聞きました。彼は妾を絹の様に軟らかく素直にしてみせると云ひました。食事してゐますと麥酒を飲んでゐた彼が卓子を平手で叩いて、「何うしてそんなに逆らうやうな眼付をするんだ？ お前は自分のことを羊の様におとなしいと思つてゐるのかも知れない。それならそれでいゝ……だが、それなら私を見る時にも羊の様な眼つきで見て貰ひたいんだ！」と、こんな事を云ふんです。妾の地位が堪らなく苦しく辛いものになりました……妾の心は次第に悲しくなつて來ました。そして何だか危ないものが心の中に段々強く動くやうになり、燈もない夜に、まんじ

りともしないで、考へて／＼考へ抜くこともあれば、外は暗闇、内には陰鬱な思ひを抱いて怖ろしい決心を次第に鮮かに認めることもありました。セミオン・マトウエイツチの到着はまた妾の考への方向を變へました。

誰も彼が歸つて来ようとは思つてゐませんでした。後で解つたのですが彼はアレキサンドルの勳章を貰へると思つてゐた處に、たゞの煙草箱を一つ貰つただけだったので、面白くないので役を止めて歸つたのでした。自分の才能を認めてくれぬ政府や、自分の不平を分ち自分の不平に同情してくれないペテルブルグの社交界を飽き足らず思つて、彼は田舎に歸り、自分の財産を管理しようと思つて来たのでした。彼は一人歸つて来ました。息子のミハイル・セミオニツチは新年の休みに、後から歸つて来ました。養父はまた主人の氣に入つてゐたので何時も其の部屋に出入りしました。お蔭で妾を苛める暇がないので妾は助かつたわけです……セミオン・マトウエイツチは、製紙工場を建てるつもりだったので、ラツチは製紙の事なんか暗い方で、セミオン・マトウエイツチもそれは知つてゐたのですが、何しろ養父は活動家、當時好んで用ひられた言葉「アラクチーフ」です。セミオン・マトウエイツチも彼の事を「私のアラクチーフ」と呼んでゐた位です。セミオン・マトウエイツチは云ひました、「熱心さへあればいゝのだ、萬事は私が差圖するから。」工場や、領地や、會計場の設計や、會計

場の規則の腹案や、その他いろ／＼の新しい仕事や勤めの忙がしい間にも、セミオン・マトウエイツチは妾の事を心配する時間は持つてゐました。

或る晩妾は客間に呼ばれてピアノを弾かされました。セミオン・マトウエイツチは、其の兄よりもまだ音楽に興味を持つてゐないので、それでも後で褒めながらお禮を云ひました。そして翌日は主人の食卓に招かれました。食事が済むと長い間セミオン・マトウエイツチは、いろ／＼な事を訊ねたりたり話しをしたり、妾の答へが可笑しくもないのに故意と笑つたり、妙な目つきで妾を見詰めたりしました……妾はそれが氣味が悪るかつたのです。妾はその眼や、あからさまの表情や、はつきりした目差を嫌やらしく思ひました。……妾にはこのあからさまの中に何か悪いものが隠されて居り、このはつきりした輝きの中に暗い心があるとしか思はれませんでした。「私の讀手にはなつて貰はんでもよろしい、」ととう／＼セミオン・マトウエイツチが意地悪さうに鹿爪らしく威儀を作つて云ひました。「有難いことにはまだ盲目ぢやないから本は一人で讀める。だがお前の小さい手から飲めば珈琲だつて旨しいわけだ。時々ピアノを聞かして貰ひ度いね。」其の日から妾は何時も大きい家に行つて夕食を食べ、時には日が暮れるまで客間に止まつてゐました。妾も養父と同じやうに受けはよかつたのですが、それは妾にとつて喜しいものではありませんでした。セミオン・マトウエイツチは、妾に對してあ

る程度まで尊敬を示しましたが、この人々には何だか嫌な安心してゐられない、或るものがありました。その「或るもの」は言葉には表はれないでも、彼の氣味悪い目差や、笑ひの中に表はれてゐました。彼は妾の父、彼の兄のことは決して口を出しませんでしたが、其の理由は妾に野心のある考へや要求を起させまいとするからではなくて、他のまだはつきりした形を持たぬ原因、けれども妾を赤面させ、當惑させる原因からのやうに思はれました……クリスマスが近くなつた頃に、彼の息子のミハイル・セミオニッチが歸つて來ました。

あゝ最う續けて書く勇気がありません。思ひ出すさへ苦しくて堪らないのですもの。特に今は氣を落着けて書くのが苦しいのです……けれども今更隠したとて何になりませう？ 妾はミハイルを愛し彼も妾を愛したのです。

何故さうなつたか……そんな事は書けません。彼が初めて客間に這入つた其の晩から……彼が這入つた時に妾はウエーベルのソナタを弾いてゐました……細つたり凜々しい彼は羊の毛皮を裏にした天鵝絨の外套を着て、長い脚絆を穿いて。寒い外から今這つたばかりの黒貂の帽子の雪を振り落しながら、彼の父に挨拶する前にちらと妾の方に眼を呉れて驚いてゐました……其の晩から妾は彼を忘れることが出来なくなつたのです……あの善良な、若々しい顔を忘れることが出来なくなつたのです。彼

は話し始めました……すると彼の聲が眞つ直ぐに妾の心に沁みましました……男らしい軟らかい聲で、眞實な、正直な心が其の響に表れてゐました。

セミオン・マトウエイツチは息子が歸つたのを喜んで彼を向きましたが、すぐ、「二週間か、え？」許を得て、え？」と訊ねてそれから妾を出しました。

妾は長い間自分の部屋の窓際に座つて大きい家の部屋を彼方此方動く燈の影を見詰めてゐました。燈影を見詰めたり新しい聞きなれぬ聲に耳を澄ましたり、愉快な騒ぎに心を惹かれながら、何だか心の中に新しい、珍らしい、明るいものが飛び込むのを感じました。彼と初めて話したのは其の翌日の食事の前でした。妾が小さい居間に座つてゐましたら彼がセミオン・マトウエイツチの用事で、養父に逢ひに來ました。妾がその場を去りかけたら彼が止めました。彼の身振りや言葉はごく生々と伸びりとしてゐましたが、ペテルブルグの尊大な調子や、横柄なところや、士官や近衛軍人らしいところほちつともありませんでした。……それどころか彼の自由な動作の中には何物かを許してくれと云ふやうな訴へるやうな恥かしがるやうなところさへあつたほどです。人に寄つては笑ふ時でも眼だけは笑つてゐない人もありますが、彼のは何時も美しい線を守つてゐるのは唇だけで、眼は何時も微笑してゐるのです。で、妾たちは一時聞ばかり無駄話をしました……何んな話、それは覚えてゐません。

覚えてゐますのは妾が始終彼の顔をまともに見入つたことだけ、そして、おゝ、彼と一緒にゐる時何んなに妾は心易く嬉しかつたでせう！

夕方妾はピアノを弾きました。妾は音楽が大好きで低い椅子に座つてちびれた髪を腕で支へて熱心に聴き入つてゐました。彼は二度も寝めませんでした、妾の音楽が氣に入つてゐるらしく思はれましたから、妾は本氣になつて弾きました。すると自分の息子の傍に腰かけて設計書を見てゐた、セミオン・マトウエイツチが不意に溢面を作つて、何時もの癖で、手で胸を撫で卸しながら鈕を嵌めてかう云ひました、「よしんぐ、最ういゝよ、何故カナリアのやうにそんなに騒ぐんだ？ 頭痛がするぢやないか、私たちのやうな老人のためならそんなにやるまいが、……」と聲を落してまた妾を歸しました。ミハイルは扉まで妾を眼で見送つてそれから立上りました。するとセミオン・マトウエイツチが、「何處に行くんだ？ 何處に行くんだ？」と答めて急に笑ひ出して何やら話してゐたやうですが、妾には聞えませんでした。失張り客間の隅の方に座つてゐたラツチ（彼は何時も其處にゐる人でした、この時は設計圖を持つて來たのでした）と妾に聞こえるやうに笑ひました……それと同じ事、でなければそれと殆ど似た事が次の晩にも繰返されました……そしてセミオン・マトウエイツチは、急に妾し對して冷淡になりました。

それから四日後に大きい家を二つにしきる邸下でミハイルに出逢ひますと彼は妾の手を取つて食堂の傍の肖像陳列室と呼ばれてゐる室に連れて行きました。妾は多少胸が轟きました、がそれでも彼を信じながら従って行きました。妾は多分其の時でも彼に従いてなら世界の果てまでも行つたでせう、ただ彼が何んな人かちつとも知らなかつたのですが、實に妾は自分で愛してゐる人がないばかりか、見知らぬ敵の中の不必要な嫌はれ者と自分でも思つてゐる若い女の總ての熱情、總ての絶望的の心を持つて彼を愛したのでした！……

ミハイルは妾に斯う云ひました……不思議なことには、妾はまともに大膽に彼の顔を見ましたが、彼は稍々顔を赧くして脇を見てゐました……ミハイルは妾の位地はよく知つてゐて同情してゐると云ひ、それから彼の父を許してやつてくれと云ひました。……それから言葉を續けて、「出来る限りは何うか私を信用し頼りに思つて下さい。あなたと私は兄弟……さうです、兄弟ですから。」と云つて妾の手を握り締めました。これには妾も當惑しました。今度は妾の方が俯向く番になつたのです。妾は最つと變つたこと、最つと變つた言葉を期待してゐたのでした。妾はお禮を申しました。すると彼は、「さや〜、」と遮つて、「そんな事は云はないで下さい……然したゞ、お助けするのは兄弟の義務ですから、若し助けが要るやうな場合には相手が何んな人でも構ひませんから私に云つて下さい……私は

僅かの間しか此處にいませんでしたが、いろ／＼な事を見ました……あなたの養父のことも解りました。かう云つてまた妾の手を握り締めて出て行きました。

後で知つたことですがミハイルは初めてラッチに逢つた時から彼を嫌つてゐたのです。ラッチは初めの間はこのミハイルの機嫌を取らうとしてゐた様ですが、後には骨を折つても駄目だと知つて、公發敵意を示し、セミオン・マトウエツチの前でも、それを隠さないのみか、機會さへあればミハイルを喜ばすことの難かしのを口惜しがるやうな風をして見せるのでした。ラッチは、セミオン・マトウエツチの性質を用心深く搜つて旨く取入りました。「あの男の自分に對する奉仕は信用していい、何故と云ふに己れがなくなつたら己れの相續者はとてもあの男を忍びはしないから、あの男も破滅する理だ。」……この考へが老人の頭に次第に強くなつて來ました。誰でもよく云ふことですが、權力のある人は年が寄つて來ると、よくこの餌、下の者が絶対に自分に奉仕してゐると信じる餌のために釣られることがあるさうです……

セミオン・マトウエツチが、ラッチを自分のアラクチーフだと呼ぶのには理由が充分あるのです……まだ他の名を呼んでいいほどです。「お前は事を面倒にするやうな男ぢやない、」と彼はよく云ひました。彼は始めからこんなになん自分を低くしてラッチに對し、ラッチの方でもまた消然と頭を片方に垂れることがあつた……

て優しくセミオン・マトウエツチを眺めながら、「あなたの仰つしやることなら何でもしますよ、」と云ひさうな顔付きで機嫌よく、淡白に笑ひました。

あゝ、妾の手が振へます。妾の胸がこれを書いてゐる卓子に觸れて烈し動悸が打ちます。あの頃の事は思ひ出すさへ血が煮え返るほど怖ろしいのです……けれども何もかも終ひまで書きませう……終ひまで書きませう！

妾が少し氣に入つてゐる間にラッチの態度の中に變つた處が見えて來ました。妾が物心がついて自分と同等な處に立つやうになつたと思つたのか、彼は妾に對して前よりも丁寧に、尊敬を混へた親しさを示して來ました。「お前は氣取るのを止めたね、」と私が或日妾と一緒に大きい家から自分たちの任家に歸る時に云ひました、「それがいいのだよ！ あんな立派な考へや上品な風流や、小難かしい道徳めいたことは、皆んな私たちのやうな貧乏人のものぢやないのだ。」

妾があまり氣に入らなくなり、ミハイルがラッチを輕蔑し妾に同情する様になると、ラッチの妾に對する冷酷は前よりもひどへなり、何か妾が罪でも犯す者のやうに始終妾の後をつけて眼を光らしました。「私の云ふことが解らないのかと？」彼は泥だらけの長靴を履いて帽子を着たまゝ扉を叩きもせず這入つて喚きます、「斯んな風ぢや困るねえ！ 何うしてそんなに偉らさうにするんだ！ 私を瞞

すつもりなのか。お前のその傲慢を懲らしめてやるから。」

或る朝、彼はセミオン・マトウエイツチの命令だと云つて、これからは招かれない以上、主人の食卓に出てはならないと告げました……若しこの時に妾の運命を根本から變へてしまふ或る事件が起こらなかつたら、萬事がこのまゝで何うなつて行つたやら、自分にも解らないほどです……

ミハイルは馬が大好きでした。或る馬を馴らしてゐたのです。ところがその馬が初めの中は無難だつたのですが、終ひにはよく蹴り出し、とう／＼彼を橋から跳ねとばしました。……腕を折つて、胸に傷を受けた彼が卒倒したまゝ家に連れて歸られました。彼の父は吃驚して町の良い醫者を呼びに遣りました。皆んなでいろ／＼の手當を盡したのですがそれでも一ヶ月は寝てゐなければなりません。骨牌は出来ません、話をするには醫者から止められてゐます、片手で本を支へつめて讀むのも面倒なものです。とう／＼セミオン・マトウエイツチの云ひつけで、妾が昔の讀み手の役をまた承ることにになりました。

それから妾に取りて忘れぬ時が續きました！ 妾は何時でも晝食が濟むと直ぐにミハイルの處に行つて半ば暗くした窓の傍の小さい圓い卓子に向ひました。彼は何時も客間の次の小さい室の奥にある、高い、眞直ぐな背に金の薄彫をした皇帝式の大きい革の長椅子に伏さつてゐました。その薄彫は

昔の結婚の行列を描いたものです。ミハイルは妾が這入ると何時も枕らからやゝ後ろに伸しかゝつた頭を上げて、蒼白い顔を妾の方に向けて輝くやうに微笑します。そして柔らかい濕つた卷髪を後ろに撫でながら靜かに、「お早やう、優しい可愛いなお嬢さん、」と云ひます。妾は本を取上げます——當時はウオタースコットの小説が大評判でした——アイワンホーを讀んだ時のことを、一番よく覚えてゐます……レベツカの言葉を讀む時には聲が鋭くなつて振るへて仕方がありませんでした。妾も彼女の様に猶太人の血を受けて運命も彼女と同じではないか？ 妾も彼女と同じやうにいとしい病人を介抱してゐるではないか？ 頁から眼を離して顔を上げると何時でも彼の軟らかい微笑を浮べた眼と妾の眼が出會ひました。二人は滅多に話はいたしません。客間に通ずる扉は何時でも開放してあつて、客間には始終誰かゝゐたのです。けれども客間が靜かな時には妾はよく眼を据へて何故ともなくミハイルを眺め、ミハイルも妾を眺め、二人とも喜びと恥かしさを感じ、一つの身振りも一つの言葉もなく總てを話し合ふことが出来たのでした。あゝ！ 妾たちの心は、一つに溶けて流れて地の底を走るのでした、見えもせず、聞こえもせず……堪らない力をもつて。

「あなたは象棋か碁が遣れますか？」と或る日彼が訊ねました。

「象棋でしたら少しはやりますの、」と妾は答へました。

「そりやよろしい。象棋盤を持つて來さして、卓子を押して下さう。」

妾は長椅子の傍に座りましたが胸が烈しく動悸打つてミハイルのを顔見る気には何うしてもなれませんでした……窓越しだつたり、部屋の向ふだつたりした時には自由に彼を見るのですが！

妾は駒を並べはじめました……指が振へました。

「勝負をしようと思つて斯んなことを云つたんぢやないのですよ、……ミハイルは駒を並べつゝ低い聲で云ひました、「あなたに傍に來て貰ひ度かつたからです。」

妾は返事もせず、何方から始めるかも知れないで駒を一つ動かしました……ミハイルは自分の番になつても動かさうともしません……妾は彼を見ました。彼は頭を少し前にのしかけて眞つ蒼になつて哀願するやうな眼附で妾の手を求めるやうな合圖をしました……

妾はその意を了解したのか何うか……それは覺えてゐませんが、それと同時に何物か頭を渦を巻いて……おづくしながら息もしないでナイトの駒を取つてすつと向ふに置きました。ミハイルは突嗟に顔を俯向けて妾の指に唇を當て、盤の上に押つけるやうにして音も立てずに烈しくそれを接吻しました……妾は手を引かうともせねば、引く力もなく、片手で顔を隠したなり、涙、今でも思ひ出しませんが、冷たい、けれども幸福な涙が……おゝ、何と云ふ幸福な涙でしたらう……一つづつ盤の上に着ち

ました。あゝ妾はその瞬間自分の手を握つてゐる人が何んな人であるかを心の底から知り、また感じました！ 彼は一時の衝動に捕はれた少年でもなければドン・ファンでもなく、女道樂をする軍人でもなく、たゞ最も高潔な、最も善良な人だったので……その人が妾を愛してゐる！

「おゝ、私のスザンナ」と囁くミハイルの聲が聞こえました、「あなたにこの涙より他の涙を流させはしませんよ。」

彼の言葉は間違ひでした……彼は死にました。

けれども斯んな追懐を話して何になりませう……特に、特に、今になつて！

ミハイルと妾はお互のものになることを約束しました。彼はセミオン・マトウェイッチが、その結婚を許さぬ事を知つてはゐましたが、妾にそれを隠さうとはしませんでした。妾も彼の父が許すとは思つてはゐませんでした。そして妾は彼が妾を欺かうとしなかつた事よりも——彼はとても人を欺くことなんか出来ない人でした——彼が自分で自分を欺かうとしなかつたのを喜びました。妾の方では何の望みもなく、彼の望むを望むやうに行き氣でした。彼は云ひました、「あなたは私の妻になるんですが、私はアイワンホーちやありません。私はロウエナ夫人は幸福ではなかつたと思ひます。」

ミハイルは間もなく健康を恢復しました。最う前の様に彼に逢ひに行くことは出来ません、けれど

も萬事は二人で約束してありました。妾は早や末來のことばかり考へてゐました。丁度大きい静かな然し霧に包まれた烈しい河の流れに漂つてゐるやうに、自分の周圍の物には少しも目を呉れませんでした。その間にも胡散臭い眼で斷へず見張られてゐました。養父の底氣味悪い眼を見たり、嫌らしい笑ひ聲を聞いたことも一二度ありました……けれどもこの笑ひ聲、この眼つきも一瞬の間に霧の中に隠れてしまひ……身顛ひはしましたが、直ぐ忘れてしまひ、また曠大な、速い河の流れに身を任せるのでした……

ミハイルが出發する前の日——彼が途中から後返りして妾を連れに歸る約束だったので——妾は彼が信用してゐる召使から彼の手紙を受取りました。それには大きい家から庭に突き出た球突場の低くて廣い室に、九時半に逢ひに来てくれと書いてありました。どうしても逢つてゐるんな事を定めなければならぬと書いてあるのです。その前に二度も球突場でミハイルに逢つたことがありますので外の扉の鍵は持つてゐました。九時半になるに温かい肩掛をすつぽり肩からかぶつて、窈と家を抜け出して、積つた雪を踏み碎きながら球突場に行きました。もやに包まれた月は朧ろに屋根の上から覗き込んで、吹き捲る風は壁の角に當つて、ひゆく物凄いな音を立て、思はずぞつと胸顛ひするのです。妾は健で扉を開けて部屋に這入つて元の通りに扉を締めました……と、向ふの壁にぼんやり黒く見え

た影がのこくと二三歩近づいて立ち止まりました……

「ミハイル、」と妾が小聲で囁きました。

「ミハイルは最う出られない様にしてあるんだ。私だ！」この聲を聞くと胸が、どきつとしました。

眼の前に立つてゐるのはセミオン・マトウエイツチです！

逸早く逃出さうとする途端に彼が妾の腕を、ぎゆうと掴みました。

「何處に行く、この、あまつちよめ？ お前はあの馬鹿と密會したも同様だからそのつもりで懲してやる。」

妾は恐怖に麻痺しながらもなほ戸口の方に逃れやうと薄掻きました……が駄目です！ セミオン・

マトウエイツチは鐵の鉤のやうな指でしつかり妾を掴まへてゐるのですもの。

「放して下さい、放して下さい、」と哀願しました。

「凝としてゐるんだ！」

セミオン・マトウエイツチは無理に妾を座らせました。ほの暗い闇につままれた、彼の顔は解りません。それに妾は彼に顔を素向けてゐました。けれども彼の烈しい息づかひと齒ぎしりの音だけはよく聞えました。妾は恐怖も失望も感ぜず、たゞ一種の麻痺したやうな驚愕を感じるのみでした……恐ら

く鷹の爪に捕へられた、小鳥はこんな麻痺を経験するでせう……セミオン・マトウエイツチの手は相變らずしつかり妾を掴へてゐて、猙獰な野獸のやうな爪で握り締めてゐます……

「あゝー」彼が云ひました、「あゝー」斯んな事をしてゐたのか……、とう／＼斯んな事になつたのか……あゝ、待てー」

立上らうとするや狂暴に妾を握り締めるので痛さに思はず聲を立てかけました。それから罵言と悪口と威嚇が一時に降つて來ました……

「ミハイルー　ミハイルー　何處にゐらつしやるの？　助けて下さいな、」と妾が呻きました。

セミオン・ミハイリツチはまた烈しく妾を揺すりました……今度は最うたまりません……妾は叫びました。

すると彼も氣が附いたのか多少穏やかになつて妾の腕を放してくれました。でも相變らず妾から一二歩の處に扉を後ろにして立つてゐます。

「二三分が立ちました……妾は身動きさへしません。彼は矢張り烈しい息づかひさへしてゐます。

聽て彼は口を開いて、「凝と座つたまゝ返答しろ。私はお前の行ひがまだ墮落してしまつてゐないか何うか、まだ道理を聞き分ける身を持つてゐるか何うか？　知り度いのだ。一時の馬鹿げた出來心は大

目に見てやるが、しぶとく嘲情げると勘辨しないぞ！　悴の……」こゝで息をついで、「ミハイル・セミオンニツチはお前と結婚する約束でもしたのか？　しなかつたのか？　返事をするんだ！　約束したのか、え？」

妾は無論返事はしませんでした。

セミオン・マトウエイツチはまた烈しい憤怒に驅られました。

「お前が黙つてゐるのは約束した證據だと認める、」と暫らくして云ひました、「そうしてお前は私の娘にならうとたくらんでゐるのだな？　うまい考へだ！　然し、お前も四つや五つの子供ぢやあるまいし、あの間抜けは目的を果すために何んな馬鹿げな約束でもするかも知れない位なことはお前にも解るはずだ。またそれだけぢやないお前は私の……この古い家柄のセミオン・マトウエイツチ・コルトラスキーガ、そんな結婚に同意すると思つてゐるのか？……それともまた親の恩恵を棄てるつもりだつたのか？……驅落ちでもして、こつそり結婚して歸つて來て、ちよつとした芝居をして、私の足元に跪いて涙もろい年寄りの情に縋るつもりだつたのか？……返事をしろ、馬鹿！」

妾はたゞ頭を垂れただけでした。妾を殺すことは出来るかも知れません。けれども妾に言葉を云はすことは……それは彼に出來ないです。

彼は暫く部屋の中を彼方此方歩いて稍々聲を穏やかにして、

「まあお聞き、お前はかう考へちやいかん……お前はかう思つちやいかん……お前にはこんな云ひ方ぢやいかんだ……お聞き、お前の氣も解らないことはない。お前は吃驚して氣が轉倒してゐるのだ……氣を引き締めるのだ！ 今は私が悪魔……亂暴者の様に見えるかも知らんが、私の事も考へてみるがよい、然るのも當り前なんだ、こんなに云ふのも當り前なんだ、また私が悪魔や亂暴でないことは是れ迄の爲たことを見ても解るはずだ。私が此處に来て以來どんなにお前を待遇したか考へてみるがよい……其後ミハイルが病氣になつてからの待遇など考へてみるがよい。斯んな事を云つて何も思を着せるつもりぢやない、たゞ……これに對してお前が感謝の念を持つてゐるなら、其の感謝の念に對しても足を踏みかけた危ない路から後返りをしてくれるのが本當だと思ふだけなのだ！」

セミオン・マトウエイツチはまたぶらぶら歩いて、それから立止まつて軽く妾の腕を叩きましたが、それが丁度先程烈しく握られて痛んでゐた處で、其の跡は長い間青く朽ちてゐました。

「實際、」と彼は言葉を續けました、「私たちは頑固だ……すこし頑固だ！ 私たちは自分の利益が何んなものか、何處に在るか、こんな問題はちつとも考へてみようとしなさい。お前が利益は何處にあるかと訊ねたとする、さうすると探し廻る必要はないのだ……お前の直ぐ傍にあるのだ……私が此處でも

る。父としては、家の主人としては難かしい事は云はねばならぬ……それは私の義務だからね。けれども私はそれと同時に一個の人間であることはお前にもよく解るだらうと思ふ。無論私は實際的の男で感傷的な無駄言なんか嫌ひな方だが、萬事と相容れないやうな期待はお前も自分の心から棄てなくちやならない、そんなものは無意味だから。——そんな行ひの不道德なことは、云ふまでもないことだ。こんな事はお前が少し考へて見ればよく解るだらう。で、簡単にまつ直ぐに云つてしまふが、私はお前に對する待遇を今まで通り以上にしたいのだ。私はお前の幸福を、しつかりした基礎の上に置き、安全な地位の保證をしてやらうと思つて何時も氣に懸けてゐたし、今も氣に懸けてゐるのだ。何故と云ふに私はお前の價値を認めてゐる、お前の才能や賢さを認めてゐる、それにまた……この時セミオン・マトウエイツチは妾の方に少し身を屈めました……お前はこんな眼をしてゐて白狀するが……私のやうな年の寄つた者でも、それを見れば……何うしても心が動くのだ、何うしても動くのだ。」

この言葉を聞いて妾は、ぞつとしました。自分の耳を信ずることが出来ませんでした。妾は最初はセミオン・マトウエイツチが妾と、ミハイルの仲を割くために賄賂を使つて、つまり「賠償金」を遣らうと云ふのかと思つてゐました……それがまあ何を云ふのでせう？ 段々眼が闇に馴れるに従つて、

セミオン・マトウエイツチの顔がはつきり解るやうになりました。笑つてゐるのです、焦々氣忙しさうにの妾前を小刻みに歩きながら、あの老人の顔が笑つてゐるのです……

「ねえ、何うだ、私の申し出を何う思ふね？」

「申し出？」……と妾は思はず繰返しました……意味が少しも解りませんでした。

セミオン・マトウエイツチは笑ひました、……實際あの嫌らしい薄笑ひをしました。

「そりやさうだ、お前たちのやうな若い女は」——と云ひかけて云ひ直し——「若い婦人とは……若い婦人は……皆んな同じことだ。……他の事は何も考へようとしな……たゞ若い男でありさへすればいいのだ。お前たちは戀なしには生きて行かれないのだ！ 何うしても生きて行かれないのだ。そりやさうだ！ 若い男はいゝに違ひない！ だが愛することが出来るのは若い男に限つてゐるとお思ひかへ？……温い心を持つた年寄りもあるよ……そして一度年寄りがある女を思つたら——最うそりや岩のやうなものだ！ 何時までたつても心が變らないし！ そこは顔の、のつべりした輕薄な若い薄のろとは違つたものだ！ さうとも、年寄を馬鹿にしたものぢやないよ！ 年寄は何でも出来るのだ！ たゞ當り前に取扱ひさへすればいいのだ！ いゝか……いゝか！ それから接吻だつて、年寄もその位のことには心得てゐらあ、ひッひッひッ……」セミオン・マトウエイツチはまた笑ひました。

「さあ！ ね……お前の可愛い手を……證據として……それだけいゝのだ……」

妾は椅子から飛上つて力一杯彼の胸を突いてやりました。彼はよろめきながらとぼけた様な、吃驚した様な聲を立てて危く轉びかけました。其の時彼が何んなに嫌らしく、何んなに氣味が悪るかつかは、とても人間の言葉では云ひ表はせないほどです。妾は怖ろしさも忘れてしまひました。

「彼方に行つて下さい、嫌やなお爺さん、彼方に行つて下さい。古い家柄の旦那！ 妾もあなたの血、コルトフスキーの血を受けてゐるんです。そして妾は自分がこの古い家柄に生れて來た日と時を呪つてゐるんです！」

「なに！……なんだと！……なに！」とセミオン・マトウエイツチが息をはづませて云ひました、「お前は……ミハイルに逢ひに來て……私に掴まへられてゐながら……、そんな事を云ふのか……え？ え？」

それでも妾は黙つてゐられませんでした……何うにもかうにもならないものが胸の底から込み上げて來るのです。

「まああなたが、あなたが、あなたの兄の弟のあなたが……そんな失敬なことを……妾を何と思つてゐらつしやるのです？ すつと前から妾があなたを嫌つてゐるのがお解りにならなかつたのですか？」

「……申し出とは何です？……直ぐ妾を此處から出して下さる！」
妾は扉の方に近よりました。

「あゝ、さうか！ あゝ、あゝ！ そんな事を云ふのか！」セミオン・マトウエイツチは忿怒に任して鋭い聲で云ひましたが、思ひ切つて、妾の方に近よらうともしません……「ちよつと待て、ラッチ・イワン・デミアニツチ、出て来るんだ！」

妾の傍の扉とは反対の向ふの扉がぱつと開いて、両手に火の點つた燭臺を持つた養父が現れました。兩方から灯に照らされた彼の赤い圓い顔は痛快さうな復讐の満足と、大事な仕事の役をはたすスラダ人の奉仕の悦びに輝いてゐました。……おゝ、その嫌らしい白い眼！ 何時になつたら妾はこの眼を見ないで済むやうになるでせう？

「濟まないが直ぐこの子を連れて行つてくれないか、」とセミオン・マトウエイツチは養父に向いて頼める手で横柄に妾を指差しました。「お前の家に連れて歸つて錠を叩いて……指一本動かさないやうに……蠅一疋這入れないやうにして置いて呉れ給へ！ 何とか後から私が知らせるまでね！ 窓も締切つて置いてもいゝ！ 萬一旨くやつてくれたまへ！」

ラッチは燭臺を球突臺の上に置いて、セミオン・マトウエイツチに丁寧に頭を下げて、それから意地

悪るさうな微笑を浮べて、傲然と妾の方に近づきました。逃げられぬ鼠に近づく猫が丁度こんなだらうと思ひます。妾は急に力を落してしまひました。妾はこの人は自分を叩くがもしれないと思ひました。ぶる／＼體が顫えて來ました。さうです、あゝ、恥辱！ あゝ、不目！ 妾は顫へました。「さあお嬢様、何うぞ此方へ」とラッチが云ひました。

彼は悠々と落着いて妾の肘の上の處を握りました！……彼は妾が暴れないのを知りました。妾は自分から進んで扉の方に歩いたのですが、其の時の妾の心は、たゞ最う一時も早くセミオン・マトウエイツチの處から逃れたいと云ふ希望で一杯だつたのです。

けれども嫌な老人は後から連いて來て、ラッチも妾をその主人の方に向き返らせました。

「あゝ！」と老人が拳を振りつゝ云ひます、「あゝ！ 私を……私の兄の弟だと云つたな？ 血が續いてると云つたな、え？ ぢやお前は従兄弟と結婚するつもりか？ そんな事が出来るか？ え？ 連れて行つてくれ！」と養父の方に向直りました、「そしてよく見張つてゐるのだよ！ ちよつとでもあれと示し合せをしたら……酷い目に合はしてやれ……連れて行つてくれ！」

ラッチは妾の部屋の方に連れて行きましたがその途々何も云はずに一人忍び笑ひをしてゐました。窓を締め切つて扉を締めて出かけようとした時、彼は先刻、セミオン・マトウエイツチにしたやうに頭

を丁寧に垂れてお辞儀をして氣味が好ささうに大きな聲を上げて笑ひました！

「お休みなさい、殿下、」と彼は息をはづませながら云ひました、「王子様に逢ひ損なつてお氣の毒さま！ これも悪くはないでせう…… あんな示し合せなんかしないやうに、これもこれからのいゝ見せしめだ！ はッはッはッ！ だが本當に旨く行つたもんだなあ！」立去つたかと思つたらまた扉から顔を覗けて、「ねえ、何時か『覺へてゐろ』と云つて置いたらう？ どうだ？ 私の云つた通りだらう？ はッはッ！」鍵が錠の中で軋る音がしました。妾はほつとしました。最つとのことで手まで縛られてしまふかと心配してゐたのですが……まあ手だけは助かつて自分のものにはなりました！ 妾は直ぐさま着物の絹の紐を引つち切つて係蹄を拵へて頭に立てかけました妾！ 直ぐまたそれを投げ棄てました。「彼奴等を喜ばしてなるものか！」と獨言を云ひました、「本當に氣違ひだ！ ミハイルに任してある生命を自分の勝手にすることが何で出来るものか！ 出来るものか！ 酷い悪黨奴！ できるものか！ まだお前さんたちの手には乗らないつもりだよ！ あの人があの地獄から引き出して下さるから、あの人が……妾のミハイルが！」

かうは云つたものゝ妾は直ぐ彼も同様に閉じ込められてゐることに氣が附いて、寢臺の上に顔を押めて「はさめく」と泣きました……泣きました……そしてたゞ若しかしたら扉の外の敵が氣味よさ

うに聞き耳を立てゝゐるかも知れないと云ふ心配が妾の涙を飲み込ませるのでした……

最う疲れました。妾は今朝から書き續けてゐるのですが早や夕方になりました。若し一度でもこの紙から妾の身を離せば、最う二度とペンを執る氣にはなれないでせう……急ぎませう、急いで書いてしまひませう！ あの怖ろしい日から後の事はとして考へてはゐられませんから！

二十四時間の後には、妾は締め切つた馬車に載せられて、離れた小屋に移されましたが、その小屋の周圍には、澤山の百姓たちがゐて、妾を見張つてゐました。かうして、六週間の閉閉じ込められてゐました！ ちよつとの間だつて、妾一人の時はありませんでした……、後で知つたことですが、養父はミハイルが歸つて來た時から、始終ミハイルと、妾に犬をつけてゐたさうです。ミハイルから妾に手紙を持つて來た召使にも、金を擱ましてあつたさうです。それからまた、あの翌日の朝父と子の間に、胸が割けるやうな場面があつて……父は彼を呪つたさうです。ミハイルは決して二度と父の家に足は踏まないと云つてペテルブルグに立ちました。養父が妾に加へようとした打撃は彼の頭に劔ね返つて來ました。セミオン・マトウエイツチが、彼に最う此處にゐて領地の世話をして貰ひ度くないと告げたのです。拙い奉仕が許しがたい咎になつたのです。誰かこの騒動の矢面に立たねばならなかつたのでした。けれどもセミオン・マトウエイツチは、ラッチを厚くねぎらつて彼が莫斯科に行つて仕

事を始めるに充分な金を與へてやりました。莫斯科に立つ前には妾も家に歸されましたが監視の厳しいことは相變らずです。「温かい小さな位置」を「妾のお蔭」で奪はれた養父は其の恨みがましい態度を一層増しました。

「何うしてお前あんな騒ぎをやつたんだ？」と彼が荒々しい鼻息をしながら云ひました。「實際あの爺さんがあんまりのぼせて急ぎ過ぎたものだから、それであんな拙い事になつてしまつたんだ。然し無論あの人も虚榮心を傷つけられたから最う今更ら元の通りに戻ることは出来ないだらう！ 若しお前が最う一日か二日辛抱してゐれば萬事三本脚のやうに盲く行つたのだ。お前も乾いた麵麩ばかり食はなくてもいゝやうになるし、私だつて元の通りに暮せるところだつたのだ！ あゝ、女の髪は長い……智慧は短かいものだ！ がまあ心配するな、まだ私がお前の味方になつてやるし、あの若い綺麗な旦那だつて賢いからね！」

云ふまでもなく妾はこんな侮辱を黙つて忍んでゐました。セミオン・マトウエイツチには、二度と逢ひませんでした。彼に取つても自分の息子と別れるのは少々こたへたのでせう。彼が自分でした事を後悔したのか、それとも永遠に妾を妾の家に縛つて置くつもりだつたのか——多分この方が本當らしいのですが——兎に角彼は妾に扶助料を約束して、妾が結婚する日まで養父にそれを渡してくれること

になりました。……妾は今でもこの恥かしい施物、この扶助料を受けてゐるのです……つまりラツチが妾の代りに受取つてゐるのです……

妾たちは莫斯科に移りました。妾は憐れな母の記憶に對して、も、莫斯科に着いたら養父とは二時間と一緒にゐまい、二時間と一緒にゐまい、……何處と云つて目當ては無いが、何處かに飛び出さう……警察に行くか、知事の足元に跪くか、長老議員の足元に跪くか、何とかしようと思つてゐました。そして田舎を出發する間際に若し妾方の小間使がミハイルの手紙を窃と妾に渡してくれなかつたら、何んな事をしたか知れないのでした。おゝ、その手紙！ 妾は幾度その手紙を繰返し／＼讀んだでせう！ 幾度その手紙に唇を押當て、接吻したでせう！ ミハイルは決して氣を取り落すな、自分の變りない愛を信じてくれ、自分は何んな事があつても他の女に氣を移しはしないと書き、妾を妻と呼び、何んな障礙にも打勝つてみせると書き、未來の計畫を書き、それからたゞ一つ忍耐だけは何うしても守つてくれ、暫らくの辛抱だけは何うしてもしてくれと書いてゐました……

それで妾は忍耐して辛抱することに決めました。あゝ、彼の云ふことなら何んな事でも聞いたでせう、何んな辛抱でもしたでせう！ 妾はこの手紙を自分のお守り、自分を導く星、自分の錨のやうに思ひました。妾は養父に烈しく叱られたり罵られたりする時にはよく胸に手をそつと入れては（ミハ

イルの手紙を護身符の中に縫ひ込んでおきました。こゝで微笑するのでした。ラッチが酷く叱れば叱るほど、妾の心は一層穏やかに、軽く、楽しくなりました……終ひには射が氣でも違ふのぢやないのかと、内々心配してゐる様子が彼の眼に讀めるやうになりました。妾はこの手紙を受取つてから間もなく最つと喜しい第二の手紙を受取りました……間もなく二人は逢へるのです。

あゝ！逢へる日の代りに或る朝が来ました……妾はラッチが這入つて来るのを見ました……また例の氣味の悪い勝ち誇つたやうな顔……手には「傷病者」の一頁を持つて居ましたが、それには近衛大尉——ミハイル・コルトフスキーの死が報じてありました。

最うこの上に何の云ふ事がありますか？ 妾は生き残つてラッチの家で暮しました。彼は前より一層妾を憎むやうになりました。最う彼の腹の黒いことはまるで妾に見抜かれてしまつたので、そのため益々妾を憎むのです。けれども最うそんな事は妾に取つては何でもないのです。謂はゞ無感覺になつたやうなもので、自分で自分の運命に興味を持たなくなつたのです。あの人の事を思ふこと！ あの人の事を思ふこと！ これより他には何の楽しみもなければ、何の興味をひくこともないのです。

可愛さうなミハイルは妾の名を呼びつゝ死んでしまひました……彼が田舎に來た時つれてゐた忠實な召使が妾にさう云つて聞かしてくれました。その同じ年に養父は、エレオノーラ・カルポーウナと結

婚しました。セミオン・マトウエイツチは、間もなく死にました。遺言によつて妾の扶助料は増されました……妾が死んだらラッチの手に入ることになつてゐます。

二年……三年経ちました……六年……七年……生命は流れて次第に退潮になつて行きます……だのに妾はたゞ其の退ひて行く潮をぼんやり眺めてゐるだけです。たとへて見れば丁度子供が河端で小さい池を掘つて、土手を作つて一生懸命に其の内の水を出すまいとしてゐるやうなものです。終ひに其の水が出だすと、今までの骨折を忘れてしまひ、今まで守つてゐた水が一滴も残らず退いて行くのを喜しさうに眺めてゐるやうなものです……

斯うして妾は生きて來ました。斯うして妾は生活して來ました。さうして遂に一つの新しい思ひがけない暖い光……」

手記はこの言葉の處で切れてゐる。次の頁は引裂かれ、結末の數行は線を引いて消してあつた。

十八

あまりに意外なこの手記を読んだため、スザンナの來訪から受けた印象があまりに深かつたため、私は一晩睡ることが出来なかつたが、夜が明けると直ぐフストフに大急ぎの使ひを遣つて、手紙で一刻

も早く莫斯科に歸らぬと飛んだ事になると知らせ、スザンナに逢つて手記を受取つたことも書いて置いた。手紙を持たして遣つた後で私は一日家に止つてゐて、今頃ラツチの家では何んな事が起つてゐるのだらうと、そんな事ばかり考へてゐた。と云つて自分で彼の家に出掛けてみる氣にもなれなかつた。けれども伯母が頻りに焦々してゐたのは私にも氣が附いた。伯母は始終合香錠を焚かせて、あの誰も成功しないと云ふ「旅人」の骨牌遊びをしてゐた。見知らぬ女が而も夜遅く來訪したと云ふことは伯母の耳に入らずには置かなかつた。彼女は直ぐ大きな口を開けた深淵のそばに危く突立つてゐる私を想像して、「Extraits de Lecture」と題する小さい寫本の中にある佛蘭西語の文句を口ずさんだり、溜息をついたり、唸つたりしてゐた。夜になると、私は寢床のそばの小さい卓子の上に、ド・ジランドの論文の「熱情の悪影響に就いて」といふ章が開いたまゝ置いてあるのを見出した。この本は無論伯母の指圖で伯母の友達の年を取つた方の女が私の室に持つて來たものであるが、この女が私方でアミ―シユカと呼ばれてゐる譯は同名の小さい衫犬に顔がそっくりだからで、最う可なりな年の老嬢なのだが頗るセンチメタルでロマンチックな人であつた。其の翌日の私は終日氣を揉みながら今にもフストフが遣つて來るか、手紙が舞ひ込むか、ラツチの家から何かのたよりがあるかと待つてゐた……ラツチの家から私方にたよりをする筈はないのだが。事によればスザンナの方で私を待つてゐるかも知

れない……が私には何しても先づフストフに逢つた上でなければ彼女を訪ふ勇氣はなかつた。私はフストフに送つた自分の手紙の文句を一々思ひ出して味はつてみた……が矢つ張りそれは充分力のある文句に違ひなかつた。夜遅く、とう／＼彼がひよつこり遣つて來た。

十九

彼は何時もの速くはあるが落着いた足どりで私の部屋に這入つた。私は彼の顔の蒼白いのに打たれた。旅行の爲に面蹙れはしてゐたが、彼には滅多に見られない驚愕と、好奇心と、不満足の様子が表はれてゐた。私は直ぐさま駈け寄つて彼を抱き締め、私の言葉に従つた事を懇ろに謝し、スザンナと取交した對話のあらましを語つて聞かした後で例の手記を渡した。彼は實際、二日前にスザンナが座つた窓際に行つて、私には何とも言はずにそれを讀みはじめた。私も部屋の片隅に退いて外見をつくらふために書物を取り上げはしたものの、白状するが私の眼は書物の上を越して、そつとフストフの方ばかり眺めてゐた。彼は始めの中は落着き拂つた左の手で唇の上に生へた生毛をひねくりながら讀んでゐたが、身動さへしなくなつた。彼の眼は行を追つて走り、口は微かに開いてゐた。聽てそれを讀み終ると彼は頁を返して、あたりを見廻し、ちよつと考へに沈んだ後また始めから終ひまで繰返

して讀んだ。それから立上つて手記をポケットに突込んで扉の方に行きかけたが、ふと立止まつて部屋のまん中に佇んだ。

「何う思ひます君は？」と私は彼が口を切るのを待たないで訊ねた。

「あの女に對して濟まない事をしました、あんまりそゝつかしい……酷い……慘酷な事をしました。ついウイクトルを信用したのだから——」

「え！ 君があんなに輕蔑してゐたウイクトルあの人が何んな事を云つたのです？」

フストフは腕を拱いて斜に私の方に向いた。彼が心に恥じてゐるのは私にも解つた。

「君も覺えてゐるでせう、と彼は口ごもりながら云つた。「あのう……ウイクトルが……扶助料のことを話してゐたのを。私はあの言葉が氣になつたのです。あれが元になつたのです。それからウイクトルにいろ／＼訊ねて……左様したらあの男が——」

「あの男が何う言つたんです？」

「あの男が、考人……何と云ふ名前でしたつけ？……さう／＼コルトフスキーだ、コルトフスキーがスザンナに扶助料を與へてゐるのは……其の譯は……つまり……その……損害賠償の意味だと云ふのです。」

私は兩手を振り上げて、

「で君はそれを本當にしたのですか？」と訊ねた。

フストフはうなづきながら、

「えゝ！ 本當にしたんです……それからまたあの男は、若い方の人とも……實際私が悪るかつた。」

「そして君は何もかも棄て、しまふつもりで飛び出したのですか？」

「はあ、こうなつちや……他に方法がないと思つたものですからね。あんまり野蠻でした、あんまり野蠻でした。」

私たちは二人とも黙つてゐた。二人とも相手の方が恥ぢてゐると感じてゐた。けれども私の方が心が安らかで、私は自分を恥ぢてはゐなかつた。

二十

「自分の間違ひだことが解らないかぎり、あのウイクトルの骨を片つ端から折つてしまつてやる。最う彼奴等の計畫がすつかり解つてしまつた。スザンナが結婚すれば扶助料が貰へなくなるからだ……馬鹿野郎！」かう云ひながらフストフは歯ぎしりをした。

私は彼の手を握つて、

「アレキサンドル、あの女に逢つた、ですか？」

「いゝえ、着くとすぐ此處に來たんです。明日行きませう……明日の朝早く。このまゝちや放つて置
かれない。何うしても放つて置かれない！」

「ですが君は……あの女を愛してゐるのですか、アレキサンドル？」

「フストフは少ゝ氣を悪くした。」

「そりや愛してゐますよ。深くあの女の事を思つてゐます。」

「立派な、眞實な心を持つた女ですよ！」と私が叫んだ。

「フストフは焦れつたさうに足を踏み鳴らして、

「君は何を考へてゐるのです？ 私はあの女と結婚しようと思つてゐるのですよ——あの女は洗禮を
受けてゐます——今でも私は結婚する氣です。私は始終左様思つてゐたのです。向ふの方が私より年
が上なんですけれども。」

忽ち私は窓際に兩肘ついて座つた蒼白い女の幻を見た。蠟燭の火は燃え落ちて、部屋の中は暗かつ
た。ぞつと顫ひして窓際をよく見たが、無論其處には何もある筈はない。けれども私は恐怖と、苦

悶と、憐憫のまじつた不思議な感覺に襲はれざるを得なかつた。

「アレキサンドル！」と私は興奮して云つた。「頼みますから、お願いしますから、これから直ぐにも
ラッチの家に行つて下さい、明日まで延ばさないでね！ 君は今日中にスザンナの家に行つた方がい
ゝです、さう蟲が知らせるやうな氣がして仕様がななんです！」

「フストフは肩を揺すつて、

「何を云ふんです本當に！ 最う十一時ですよ、最う皆んな寝てゐますよ。」

「構ふもんですか……お行きなさい、お願いですから行つて下さい！ 何うも蟲が知らせるやうな氣
がするんです……何うぞ私の云ふ通りにして下さい！ 直ぐ行つて下さい、櫓に乗つて……」

「そんな事が出来るもんですか！」とフストフは冷やかに答へた。「今頃何うして行けます？ 明日の
朝行けば萬事がはつきり解るのです。」

「だつてアレキサンドル、あの人は、死ぬると云つてゐましたよ、最う逢ふまいと云つてゐましたよ
……それに君が逢へたら！ まあ考へてごらん……さい、私に逢ひに來るまでの、決心をした其の心を
……何んなにそれが辛らかつたか……」

「あの女は少し大袈裟な方ですからね、」とすつかり落着いたフストフが云つた、「大抵の女が始めはあ

「なんですよ。また云ひますが明日になれば萬事綺麗に片づきますよ。最う失敬ませう。私は疲れ
てゐるしあなたも眠いでせうから。」

彼は帽子を取つて部屋を出かけた。

「然し直ぐ私方に来て萬事お話しして下さいを約束してくれますか？」と私が後ろから訊ねた。

「約束します……左様なら！」

私は寢床にもぐり込んだものゝ、心の中は氣懸りでならず、頻りに友を齒痒く思つた。私は遅く眠
入つてスザンナと地の底の濕つぽい道をさ迷つてゐるやうな夢を見た。細い急な階段を上らうとあせ
るのだがあせれば、あせるほど次第に深く落ちて行つた。其の間にて誰か頻りに單調な悲しさうな
聲で私たちを叫んでゐた。

二十一

誰か私の肩に手をかけて五六度揺すつた……眼を開けてみれば一本の蠟燭のはの暗い光に照らされ
て眼の前にフストフが佇んでゐる。力なく佇んで彼の顔は殆ど髪と同じやうな黄色になり、唇は垂れ、
ぼんやりした眼で無感覺に向ふを見詰めてゐた。あの何時も變りのない愛嬌のいい、同情に富んだ表

情は何處に行つたのだらう？ 私の従兄弟に癩癩から白痴になつた男がゐた……此の時のフストフは

丁度その男に似てゐた。

私は直ぐ跳ね起きた。

「何うしたんです？ 一體何うしたんです？」

彼は返事をしない。

「何んな事になつたのです？ フストフ！ 聞かして下さい！ スザンナは……！」

フストフはぎよつとして、

「あの女は……」とかすれた聲で云ひかけたが言葉は途切れた。

「あの女は何うしたんです？ 逢ひましたか？」

彼は私を見入つた。

「あの女は最うゐなくなりました。」

「最うゐなくなりました？」

「ええ、死んだのです。」

私は寢床から飛び出した。

「死んだ？ スザンナが？ 死んだ！」

フストフはまた眼を素向けた。

「え、死にました、夜中に死にました。」

私は心で「この人は讒語を云つてゐるのだ」と思った。

「夜中に！ ちや今何時です？」

「今は朝の八時です。あの家から私方に知らせが来ました。明日埋めるさうです。」

私は彼の手を握り締めた。

「アレキサンドル、夢を見てゐるんじゃないのですか？ 正氣なんですか？」

「正氣です、知らせがあると直ぐ此處まで来たところなんです。」

私は取り返しのつかぬ不幸に逢つた時、何時も感ずる胸が麻痺するやうな苦しさを覺えた。

「おや／＼！ 死んだ！ 何うしてそんなに早く？ 多分自分で死んだのでせう？」

「そんな事に何も知りません。たゞ夜中に死んだ事と明日埋めることだけ聞いたのです。」

私は思つた、「夜中に、ちや昨夜あの女が窓際にゐるやうに思つた時には、急いで逢ひに行つてくれ

と頼んだ時にはあの女はまだ生きてゐたのだ……」

「君がイワン・デミアニッチの家に行けと云つてくれた時はまだ生きてゐたのです。」とフストフは私の腹の中を察して云つた。

私はまた思つた、「この人はちつとあの女を知らなかつたのだ！ 私たちは二人ともあの女を知らなかつたのだ！『大袈裟』だと云つた、『大抵の女があゝだ』と云つた……丁度この人がそんな事を云つてゐる時に恐らくあの女は『愛してゐながら斯んな大きな間違ひをすることがあるものだらうか？』と云つてゐただらう。」

フストフは私の寢床の前に両手を垂れて、罪人の様に悄然と佇んでゐた。

二二二

私は急いで着物を着て、

「これから君は何うするつもりです、アレキサンドル？」と訊ねた。

彼は私の質問の、不合理なのに驚いたやうにまじ／＼私を見入つた。また實際何うする事が出来よう？

「然し行つてみることは行つてみなくちやなりませんよ、」と私が云つた、「罪惡は隠れてゐるかも知れ

ませんから、出来事を一度確かめて見る必要はありますよ。あんな人たちは何をするか知れたものぢやありませんからね、……充分検査してみなくちやなりません。手記に書いてあつたぢやありませんか、あの女が結婚すると扶助料が止みますが、死んだ場合にはそれがラッチの手に移るのです。どちらにしても兎に角あの女に最後の義務を果し、あの女の遺物に手向けをする必要はありますよ！」

私はフストフに向つて教師のやうに、兄のやうに口を利いた。この恐怖、この悲哀、この困惑の中に在つて、私は無意識ではあるがフストフに對して或る一種の優越を感じた無茶苦茶になつた過失の意識に取亂してゐる彼を見た爲か、それとも人間の上に降りかゝる不幸と云ふものが其の人をみじめにし、恥かしめ、他人から見下されるやうにして、「其處から起き上るだけの知慧がないならお前は駄目だ！」と感じさせる爲か、兎に角フストフは私の眼に子供の如く見える様になり、私は彼を不憫に思ひ、手酷く出る必要を感じた。私は助ける様に手を差し伸べて彼の上にのしかゝつた。こんな場合見下げる氣の混らないのは女の同情だけである。

けれどもフストフは相變らず荒々しい間の抜けた眼差で私を見入つてゐた——私の權威を含めた聲の調子も何の利き目もなかつたのだ。そして私の「あの家に行くでせうね」と云ふ第二の質問に對して彼は、

「いゝえ、行きません」と答へた。

「何うして君はそんな事を云ふんです？ 君自身で出かけて事情をよく調べてみる氣にはならぬものですか？ 手紙が残してあるかも知れませんが……記録か何か……」

フストフは頭を振つて、

「私は行きません、だから君の家に来たのです、君に行つて貰はうと思つて……私の代りに……私は行きません……行きません」

フストフは唐突に卓子の前に腰かけて両手に頭を埋めて歎歎、だした。

「あゝ！ あゝ！ あゝ！ 可哀さうな女だ！ 可哀さうな女だ！……私は愛して……愛してゐたのに……あゝ！」と彼は涙ながらに口惜しがつた。

私は彼の傍に立つた、けれども白状するが私はこの疑ふ餘地もない誠實な歎歎に對して少しの同情も起らなかつた。私はたゞフストフが斯んなに泣くのを不思議がるより他なかつた。そして今こそ彼が如何に小さい人間であるかを知つたやうな氣がした。そして自分だつてこんな振舞ひはしないだらうと思つた。では何うすればいゝか？ 若しフストフが心を動かさずに落着き拂つてゐたとすれば、私は彼を憎み、彼を嫌がりはしても、彼を尊敬しなくなりはしなかつた。……彼は彼の威嚴を保

つた。らう。ドン・ファンは飽くまでドン・ファンとして通つたであらう！ 人が友人の過失や弱點を見た時、自分自身の徳と力を窃かに喜ぶやうなことをしないで、自分の心を貧しくして、罪の必然にして殆ど避くべからざることを思ひながら其の人に同情したり、其の人を救つたりするのは、人が餘程年を取つていろいろな經驗をした後でなければ出来るものではない。

二十三

私はフストフをラッチの家に遣らうとする時には頗る大膽で思ひ切つたところがあつたが、さて十二時になつて自分が出かけてみて、(フストフも一緒に連れて行かうとしたのだが彼は歸つて詳しい話を聞かしてくれと云つたのみで何うしても連いて來なかつた) 街の角を廻つて向ふに家の窓から棺に供へた蠟燭の火が朦朧と黄色に光つてゐるのを見た時には、云はれぬ恐怖に襲はれて思はず息をこらして後退りをしようとした……けれども氣を取直して廊下に這入つた。香と蠟の匂ひが鼻を打つた。片隅には壁に立てかけた銀のレースで縁を取つた棺の覆布が見えた。隣の食堂では坊主の單調な讀經が蜂の唸り聲のやうに聞えてゐた。客室から睡むさうな顔をした女中がのこ／＼出て來て「死んだ人に禮拜しようと思つてゐらしたの？」と訊ねて食堂の扉を指差した。私は内に這入つた棺は扉を頭

にて横たはつてゐたので何よりも先づ白い花輪と一緒にレースの棺に載つてゐるスザンナの黒い髪が眼についた。私は傍によつて十字を切り、跪いて禮拜して彼女を見た……あゝ！ 何と云ふ苦しさをな顔だらう！ 不幸な女！ 死さへこの女を憐むのを拒んだのだ。死さへ——美は少ないにせよ——死人の顔によく見られるあの優しい印象深い平和を與へるのを拒んだのだ。スザンナの小さい、暗い、殆ど鶯色をした顔は古い古い聖畫の肖像を思ひ出させた。そしてその顔の表情！ まるで今にも絶望の叫び聲を上げやうとして——而も何の音もなく死んだものゝやうだ。……眉と眉の間の線も消してなければ、手の指も握り締めたまゝである。私は思はず顔を素向けたが、暫くしてまた氣を取り直して、長い間眼を据えて彼女を見た。私の心は憐憫の情に満たされた。憐憫の情ばかりではない、私は心に叫んだ、「この女が暴力で死んだのは疑ひのないことだ」と。私が傍に立つて死んだ女をしげ／＼眺めてゐると、先つき私が這入つた時に聲を高くして纏りのないことを切れ／＼に言つた僧侶は、また睡むさうな聲になつて欠伸を二度ばかりした。私はまた跪いて禮拜をして、それから廊下に出た。客室の入口には灰色の寛衣を着たラッチが私を待受けてゐた。彼は私に手を振つて見せて彼の居間と云ふよりは寧ろ彼の巢に連れて行つた。暗くてむさくるしくて、腐つた煙草の酸っぱいやうな匂ひの籠つたその部屋は何うしても狼か狐の巢を思はせるのであつた。

「破裂なんですよ！ 心臓の外の皮……外の皮……御存知でせう……包みが破裂したんです！」とラッチは扉を締めるとすぐ云つた。「ほんとに不幸なことだ！ たつた昨日までは何の變も無かつたのです。それが急に、ちよつとの間に斯んなことになつてしまつたんです！……*Heart, in front*とはよく云つたものですね。ですから私も左様思つてゐました。タムボフの聯隊の軍醫の、ウイケンテイー？ カシミロウイッチ・ガリンボフスキー……あなたもあの人は御存知でせう……一流の専門の醫者ですが——」

「そんな名を聞いたのは初めてです」と私が口を入れた。

「まあ兎に角、その人が何時も、」とラッチは始めは低い聲だつたが次第に聲を高くして終ひは不思議にも獨逸風の調子さへ混へて話を續けた。「その人が何時も云つてゐました、「おい、イワン・デミアニッチ！ 用心しないとお前の養女は心臓肥大病だよ！ ちよつとの油断で大變なことになるよ！ 何よりも感情をかぶらせるのが悪いのだ……よく道理を論じてやり給へ」と云つてゐました……だつて實際若い女に……道理なんか論せるものですかねえ？ ハツハツ……」

ラッチは何時もの習慣で大笑ひしかけたか、ふと氣がついて笑ひを咳きに紛らしてしまつた。

そしてこれがラッチの云つたことであつた！ ラッチが云つた總てであつた……けれども私は醫者を叫んだが何か訊ねてみるのが自分の義務のやうな氣がした。

ラッチは實際空中を飛び上つた。

「呼びましたとも……二人呼びましたがね、最う濟んだ後ですよ——*Byemacht!* そしてまあ考へてごらんさい、二人とも申し合はせるやうに（ラッチは申し合はしたやうにと云ふつもりだつたのだらう）破裂だ！ 心臓の破裂だ！ と同じことを云つたのです。醫者は死體を解剖したいと云ひましたが……あなたにもお解りでせうが私はそんなことは斷つてしまひました。」

「で葬式は明日なさるのですね？」と私が訊ねた。

「え、明日です、明日あの子を埋めることにしました！ 家を出るのが、きつちり朝の十一時……それから「鶏の足」の聖ニコラスのお寺に参ります……あなたのお國の露西亞では寺に妙な名前をつけるものですね、それから最後の安息の場處たる母の土地に埋めます。あなたも來て下さい！ あなたは古いお馴染ちやありませんが、打明けて云ひますが、あなたの性質の優しいことや、感情の高潔なことは……」

私は急いで領いて見せた。

「本當です、」とラッチは消息をつけた、「實際晴れた空から雷が落ちたやうなものです！ Ein Blitz aus 'ei erem Himmel！」

「でスザンナ・イワノフナは死なれる前に何も仰つしやりませんでしたか、何も遺したものはありませんでしたか？」

「何もありません！ 紙の端切れ一つありません！ 考へて御覽なさい、皆さんが私を起こしに來た時には早や固くなつてゐたのですからね？ 何しろ、がっかりしましたよ。皆さん悲しがりました！アレキサンドルと、ダウデウイッチも聞いたら嘸お嘆きになるでせう……何でも莫斯科にはゐらつしやらないそうですね？」

「あの人は二三日前に田舎に行きました……」と私が云ひかけると、

「ウイクトル・イワニッチが櫛の用意に暇が掛ると云つて怒つてゐらつしやいますよ、」と女中が這入つて遮つた——先つき廊下で逢つた女中だ、この女は相變らず睡むさうな顔はしてゐたが、今度は無遠慮な傲慢な頼附をしてゐるのに驚いた。この顔付は主人が自分の勢力の中にあつて、難かしい小言は云はないと知つてゐる時によく見える頼附である。

「直ぐだ、直ぐだ、」とイワン・デミアニッチが神経質らしい聲で答へた、「エレオノーラ・カルボウナ：レオノーラ！ レンヘン！ ちよつとおいで！」

扉の外で何か重いものゝ動く響がしたかと思ふとウイクトルの威丈高な聲が聞こえた「何うして皆んな馬を付けてくれないのです？ 警察まで歩いちゃいけませんよ！」

「直ぐだよ、直ぐだよ、」とイワン・デミアニッチがまた答へた、「エレオノーラ・カルボウナ、ちよつとおいで！」

「だつてイワン・デミアニッチ、ich habe keine Toilette gemacht！」
「Macht nichts Komm herein！」

エレオノーラ・カルボウナが頸根に巻きかけた頭巾を……本の指でつまんだまゝ出て來た。彼女は鉤もはめず朝の巻衣を引つかけて、髪もまた手を入れてゐない。イワン・デミアニッチは、彼女の方に進み出た、

「ウイクトルが馬を呼んでゐるぢやないか、」と云ひながら氣忙しうに始めは扉、次に窓の方を指差した。「早く出来るやうにしてやつておくれ！」
「er kerl schreit so！」
「Femianitch, Sie wissen wohl, so 〴〵に妾も馭者に云ひ付けといたんですが、馭者はそれを馬に燕麥を食はせることだと早合點しました

んです。まあ思ひ懸けないことになりましたね。」と今度は私の方に向いて、「スザンナ・イワノフナが斯んなことにならうとは誰だつて思つたこともありませんでしたわ。」

「私は前から斯うなるだらうと思つてゐた、前から！」かう云ひながらラッチは腕を振り上げた。電衣が前にはぐれて、帯革の締金と共に嫌な羚羊の皮の股引が見へた、「心臓の破裂なんだ！ 外皮の破裂！ 肥大症なんだ！」

「ほんとうに左様ですわ、肥……肥大……でしたはね。けれども何度も云ひますがたゞ妾は悲しくつて……」かう云ひながら彼女は粗末な顔の形を少し變へて、眉毛を三角形に釣り上げて人形の頬のやうに光る圓々とした頬に小さい涙を一滴流した。「これからいろ／＼の楽しみのあるあんな若い女が……こんなに急に無くなつたのかと思ふと妾は悲しくつてなりません！」

「Nai gut, gut……geh, ait!」とラッチは遮つた。

「Geh! s h n. Geh! s h n!」と低い聲でエレオノーラ・カルボウナが呟いた。そして頭巾を指に支へて涙を流しながら出て行つた。

私も彼女の後に従つて部屋を出た。廊下にはフラッシュユカを小意氣に横丁に冠つた海狸の毛革の襟のついた學生服を着たウイクトルが立つてゐた。彼は肩越しにちよつと私を見たなり、襟を揺すり上げ

て私にうなづきもしなかつたが、それは私にも丁度有難かつた。

私はフストフの家に足を向けた。

二十五

私が這入ると彼は自分の部屋の片隅に座つて俯向いて腕組みをしてゐた。彼は殆ど神経が麻痺して深い眠りから今覺めたばかりの人のやうに靜かな怪訝げな目差で周圍を見廻してゐた。私はラッチの家を訪ねた時のことを何もかも語つて聞かせた。あの老兵や妻君の言葉や、彼等から受けた印象をすつかり話した。そしてあの不幸な女は自殺したに違ひないと云つて聞かせた……顔の表情を少しも變へないで耳を傾けてゐたフストフは相變らず當惑したやうな眼付で周圍を見廻した。

「あの女を見たのですか？」と暫くして彼が訊ねた。

「見ました。」

「棺の中に這入つてゐたのを？」

フストフはまだスザンナが本當に死んだのか何うか疑つてゐるらしかつた。

「え、棺の中に這つてゐたのを。」

フストフはちよつと頷を引き釣らせ、それから眼を伏せて手をこすつた。
「寒いのですか？」と私が訊ねると、

「えゝ、寒いんです。」とためらいながら答へて彼は間の抜けた頭の振り方をした。

私はスザンナは自分で毒を仰いだのか、でなければ毒を飲まされたのか、何方かに違ひないと思ふ理由を説明して、このまゝに棄て、置くべきものではないと云つて聞かせた……

フストフは私を見詰めた。

「だつて、それぢや何うするんです？」と云つて彼は靜かに眼を大きく見開いてまた靜かに閉じた。

「若しそんな事が解つたら……難かしくなるだけです。あの女を埋めはしませんよ。だから私たちは抛つて置くのです。」

簡単なことだがこの考へは私の頭に浮ばなかつた。私の友の實際的の考へはまだ彼を見捨てなかつたのだ。

「葬式は……何時です？」と彼は言葉を續けた。

「明日です。」

「君行きますか？」

「はあ。」

「家にも、それとも直ぐに寺に？」

「家にも寺にも、それから墓地にも行きます。」

「だが私は行かない——私は行かない、私は行かない！」かう呟きながらフストフは泣き出した。今朝泣き出したのも矢張りこれと同じことを云つた時であつた。私は泣く時にはよく斯んなことがあるものだと思つてゐる。丁度人間にはある特別の言葉、その言葉には別に大した意味はないのだが、他の言葉でなく、其の言葉に限つて、その人の涙の泉を開き、その人を悲しませ、その人に自分や、他人を憐れむ、感情を起こさせることを許されてゐるやうに思はれる。私は曾てある自忘性の老婆が私の前で自分の娘の死んだ話をしてゐるのを聞いたことがあるが、その老婆は、「私は娘を『フォークラ』と呼びました、さうしますとね、娘が云ひました、『お母さん、鹽は何處に置いてあるの……鹽……鹽？』」こゝまで来ると、老婆は最う氣を失なつてしまつて話を續けることが出来なかつたのだ。「塩」と云ふ言葉に壓倒されてしまつたのだ。

けれども私は今度も今朝の時と同じやうにフストフの涙にあまり心を動かされなかつた。私はスザンナが彼に何か残しはしなかつたか、それを私に訊ねない彼の心が何うしても臍に落ちなかつた。彼

等二人が相互に對する愛は私にとつて全々迷であつた。そして今でも迷として殘つてゐる。十分ばかり泣いた後でフストフは起上つた長椅子の上に横になり、顔を壁の方に素向けて身動きもしなくなつた。私は暫く待つてゐたが身動きもせず、物を訊ねても答へもしなかつたからもう歸ることにした。これは恐らく私が悪かつたであらう。けれども私には彼が眠てゐるとしか思はれなかつたのだ。これが何も彼が悲しみを感ぜなかつたといふ證據になりはしないのだが……たゞ彼の性格が苦しい情緒を餘り長く支へることが出来ないやうに出來てゐるだけなのだ。……彼の性格は何處までも調和が取れてゐるのだ。

二十六

翌日の丁度十一時に私はラッチの家に行つた。低く垂れた空からは、小さい霰が降つて薄い霜を結び、早や雪溶けの期節も近いと云ふに中空には身を切るやうな不愉快な風が飛んでゐる……全く四旬祭頃の風を引きさうな天氣だ。私は家の入口に立つてゐるラッチを見た。黒のフロックコートに喪章を附け、頭には帽子も冠らないで忙しさうに兩腕を上げたり、自分の腿を叩いたり、家の方に向いて喚いたり、早や二臺の貸馬車と共に立つて白い龜のある葬儀車の方に向いた喚いたりしてゐる。其の

傍には喪の肩掛の古い服に喪の帽子を目深に冠つた四人の儀仗兵が、目を細くして悲しさうに、火の黙いてゐない炬火の長い柄で雪を拂つてゐる。ラッチは赤い顔をして灰色の頭髪をピンと立て、厚かましい調子外れの、龜裂破れた聲で奴鳴つてゐた、「松の枝は何處だ？ 松の枝！ 此方だ！ 松の枝！」と奴鳴つたり、「直ぐ棺が出るよ！ 松！ この松を渡すのだ！ しつかりしろ！」と叱つたりして、家の中に駆け込んだ。私は時間通りに來たのだが少し遅れてゐた、多分ラッチが萬事を早めに急いだのだらう。家の中の式は早や済んでゐた。一人は僧帽を冠り、一人は若くて綺麗に油が髪を分けた二人の僧が供の者を連れて階段に姿を現した。間もなく駈者と二人の門番と一人の水運びとに支へられて棺が運び出された。その後からラッチが棺の蓋に指を當て、「靜かに！」と云ひながら連いて出た。彼の後ろからこれもまた喪章をつけて黒装束でエレオノイラ・カルボウナが、家族の者と一緒に小刻みに歩いて出た。一番後から新しい制服で、劍の把に喪章をつけたウイクトルが現れた。棺を擔ぐ人たちは何やらぶつ／＼言つたり罵り合つたりしながら柩車に棺載せた。儀仗兵が炬火に火をつける、ぶす／＼音がして煙が出た。何處からともなく、一行に紛れ込んだ一人の老婆は聲を上げて泣きだした。僧侶たちが歌ひ、すと雪が一層烈しくなつて「白い蠅」のやうに渦を卷いた。「さあ、出發させよう！」と云ふラッチの聲と共に一行は動き出した。柩車の傍にはラッチの家族の他に五人

ゐた。色の褪めたスタニスラス勲章の綬を——多分借りたのだらう——、頸にかけた見すばらしい退職の道路官吏と、優しい顔に欲深かさうな眼つきをした小男の警部補と、綾織の襦衣を着た小さい老人と、ぶん／＼魚の匂ひのする青いジャケツを着た、馬鹿に肥えた肴屋と、それから私、この主人であつた。女性の會葬者のゐないことは(エレオノラ・カルボウナの二人の伯母の腸詰屋の姉妹と、青い鼻に青い眼鏡をかけた駝背の老嬢などは、誰でも女性に敵へようとはしない)若い女の友達や知合ひのゐないことはちよつと私を驚かせたけれども、よく考へてみて、スザンナの様な性格と教育と思ひ出を持つた者にとりて今彼女が屬してゐる階級の人に友達を作るのは難かしいことだと気がついた。寺には澤山の人が集つてゐたが顔附きを見ても解るやうに知合ひよりも見物人の方が多かつた。式は長くかゝらなかつた。私が驚いたのはラツチがまるで正教徒のやうに頗る眞面目に十字を切り、その上文句でなく聲ばかりではあつたが役僧の讀誦に調子を合してゐたことである。愈々死者に別れを告げる時が來ると私は接吻はしなかつたが低く頭を下げた。ところがラツチは至極落着きはらつてこの怖ろしい仕事を遣つてのけ、それから懇懇にスタニスラスの綬をつけた官吏をまるで響應でもするやうに棺の傍に招いた。そして、順々に下を抱へて死者を覗かしてやつた。エレオノラ・カルボウナはスザンナに別れを告げて行くも不意に寺中に響くやうな大きな聲を上げて、わつと泣き出した、けれども

間もなく宥められて今度は頻りに、「だが妾の手提袋は何うしたかしら？」と小聲で啼いてゐた。ウイクトルは一人離れてゐた。そして如何にも斯んな習慣には同情しないが、唯社會上の義務として此處まで來たのだと云はねばかりの態度を見せてゐた。一番深い同情を示したのは、十五年前にタムボフ縣で土地測量をしてゐたが、それ以來ラツチに會はないでゐた襦衣を着た小さい老人であつた。この男はスザンナをちよつとも知らないのだが、出る前に戸棚の前で、酒を二杯ばかり呷つて來たのだ。私の伯母と寺に來てゐた。伯母は何處から聞いたのか死んだ女と先日家に來た女と同じ人だことを知つて非常に心配してゐた。彼女は私が不始末な事をすると思ふ氣にもなれないのだが、それかと云つて斯んな不思議な事情のつながりを覺ることも出來ないので……多分スザンナが私に戀をして、其の爲めに自殺したの位に思つたのかも知れない。黒い喪服をつけて痛ましげに涙を流しつゝ跪いて無くなつた人の魂の平安を祈り、「悲哀の慰め」と云ふ繪の前に一留の蠟燭を一本立てた。……「アミーシユカ」も伯母と一緒に來て祈禱をしたが喉りに私の方を眺めて驚いたやうな顔をしてゐた……この未婚の老婆も、おや／＼！私を何とか思つて見てゐるのだ。寺を出る時に、伯母は十留以上の持つてゐた金を皆んな貧乏人に分けて遣つた。

とう／＼告が濟んだ。聽て彼等は棺の蓋をしはじめた。式の間私は何うしても女の引き釣つた顔

を平視するに耐えなかつたが、ちらとそれに眼が走る毎に——「あの人は来て下さらなかつた、」あの人は来て下さらなかつた、と云ひ度げな顔をしてゐるやうに思はれた。皆んなが眼の蓋を卸しはじめた。私は自分を制しきれなくなつてまた死んだ女にちらと素早く眼を呉れた。「あなたは何うして斯んな事をなさつたのです？」と私は無意識に訊ねてゐた。……「あの人は来て下さらなかつた！」とまた最後に聞くやうな氣がした。……聽て槌が釘を打ち出だした、最う何もかもおしまひだ。

二十七

私たちは柩車に従つて墓地に行つた。一行は五十人ばかりであつたが、いろ／＼の状態の下に集まつたいろ／＼の種類の人で、實は怠けた群衆に過ぎなかつた。懶い歩行は一時間以上も續いたらう。天氣はひとしほ悪くなつて來た。ウイクトルは途中で馬車に乗つてしまつたが、ラッチは元氣よく汚れた雪の上を進んだ、彼が會てセミオン・マトウエイツチとあの運命を定める面會をした後で、やがては自分が永遠にその生命を破壊すべき娘を連れて勝ち誇りながら雪の上を家に歸つた時にも、度こな歩き方をしたであらう。「老兵」は髪や眉毛を雪で白くして、始終大きな聲で叫び廻つては、元氣よく息を一杯吸ひ込んで圓い鼻の赤な頬をふくらしてゐた……人が見たら笑つてゐるとしか思はれなかつた。

つた。「妾が死んだら扶助料はラッチの手に入ることになつてゐます、」スザンナの手記の中のこの言葉がまた私の心に甦つて來た。聽て私たちは墓地に着いて新しく掘つた墓穴の傍に寄り集つた。其處で最後の式が手早く行はれた。皆んな凍えてゐた、皆んな急いでゐた。綱を滑つて棺が口を開けた穴の中に這入ると皆んな其の上に土を掛けだした。ラッチは今度もまた元氣を見せて、片足をしつかり前に踏み出して勇ましさうな姿勢で力を込めて棺の上に土を投げた……彼の最も苦い敵に對して石を投げる時でもこんな元氣は見せないであらう。ウイクトルは相變らず一人離れて外套にくるまつたま、襟の毛革で頤を擦つてゐた。ラッチは子供たちは本氣になつて父の間似をしてゐた。砂や土塊を投げるのは彼等の大好きなことでもあり、またそれは叱られることでもなかつたのである。穴であつた處が山の様に少し高くなりかけた時私たちが解散しかけたら、ラッチが軍隊式に左に向き直つて、ぼんと股を一つ叩いて、私たち「紳士諸君」及び「尊敬すべき坊様」を「葬式の饗宴」に招待すると云ひ、その會場は墓地から餘り遠くない頗る立派な料理屋の廣間で、「我が名譽ある友人シギスムンド・シギスムンドウイツチの親切な斡旋によりて、準備が出来てゐると云ひながら警部補を指した。そしてまた自分即ちイワン・デミアニッチ・ラッチは悲しんでゐて、またルーテル派の信仰を持つてはゐるが純粹の露西亞人として何よりも先づ露西亞風の云ひ方をすると云つた後でかう呼んだ、「私の妻は他の婦

人方と一緒に家に歸つてよろしい。私たち男子は「主の逝ける下僕」の靈魂を記念するために、護んで食事を共にしようではありませんか——このラッチの提言は混りけのない同情を以つて迎へられ、「尊敬すべき坊様たちは互に意味ありげに眼を見交し、道路官吏はイワン・デミアニッチの肩を叩いた、彼を愛國者だ、一同の魂だと褒めた。

私たちは揃つて料理屋に行つた。料理屋の一階の長いガランとした廣間の中央には椅子に圍まれて二つの食卓があつて、其の上に酒だの御馳走だのいろいろのものが一杯並べてあつた。白い塗料の匂ひは酒やサラダの油の香と混つて息がつまるやうであつた。この饗宴の轉旋者たる警部補は上席に僧侶を座らせ、其の前に四旬祭の皿を見事に並べ、僧侶の次に他の客を座らせ、それから饗宴が始まつた。私は好んでお祭らしい饗宴と云ふ字を用ひる譯ではないのだが、この事實を理す言葉としてはこの他にないのだ。始めのうちは、皆んな至極穩かで寧ろ打沈んだ氣味で、むしや／＼忙しげに食べた。杯を飲みほしたり、溜息も度々聞かれたが、これは食べる時の溜息でもあれば、感情の溜息でもあつたらう。死に關する話や、人生の短かいこと、地上の希望の果敢ないことなどの話が出た。道路官吏は軍隊の話だがそれでも面白い逸話を話した。僧帽を冠つた僧も同意するやうな意を仄めかして自分も聖イワン武者の傳記の中の興味ある話を持ち出した。綺麗に髪を分けた僧は食へることに夢中

になりながらも、貞操を褒める話に二口三口に相槌を打つたけれども段々様子が變つて、人々の顔が次第に赤くなり、聲が高くなつた頃には笑ひ聲がひとりで現れて來た。思ひがけない呼び聲や、馴れ／＼しく呼ぶ聲が其處此處で聞こえた。「可愛いお前さん」だの、「生きた可愛い人」だの、「いゝ鶏」だの、甚しきは「豚のやうな」だの、——兎に角露西亞人が謂はゆる「鉦をはづして」來た時によく出る總ての馴れ／＼しい呼び方が聞かれた。内國製の三鞭酒がボン／＼抜かれる頃には、食卓が頗る騒がしいものとなり、或る人は實際鶏の鳴き間似をし、或る人は自分が今飲んだばかりの杯を他人に啣へさして飲ました。最う赤いのを通り越して紫になつてゐるラッチは今までは高笑ひをしてゐたが此の時突然立上つて演説をさしてくれと云つた。「何うぞお願ひします」と皆んなが喚いた。襦衣の老人は「ブラーヴォー」と叫びながら拍手したくらひだ……彼は早や床の上に座つてゐた。ラッチは頭の邊まで杯をさ／＼けて、それから簡單な、けれども「明瞭な」言葉で此の世を去つた尊い靈魂の性質について一口話し度いと云ひ、其の靈魂は「この地上の殻 (die irdische Hölle) を脱ぎ棄てて天に昇り、そして彼女の親切な家族の者を、皆んな取り返しのかね、悲哀の中に投げ込みました……」と云ひかけてラッチは言葉を訂正して、「跳ねとばしました、……」また訂正して、「投げ込みました……」

「お坊様！ お坊様！」と低い熱心な聲が聞こえた。あなたは馬鹿にいゝ聲を持つてゐらつしやるといふ評判ですよ。一つ歌つて下さいませんか。我れらは野に住む！」

「しッ！ しッ！……静かに！」と皆んが制した。

「家族の者を皆んな、」とラツチは音楽を愛する人の方に鋭い眼を呉れながら續けた。「取り返しのかぬ悲哀の中に投げ込みました！ 左様です！ 露西亞の諺にもありますが、「運命は鞭を遠慮せぬ」とはよくつ云たものです……」

「待つて下さい！ 皆さん！」と食卓の一番端に腰かけてゐた男が嗚咽を……して喚いた。「私は財布を取られてしまつた！」

「あゝ、この騙兒奴！」と他の聲が叫んだと思ふとボカンと耳の上を撲る音がした。

實にそれからの騒ぎ！ さながら今まで私たちの中に微かに動き呻いてゐた野獸が急に鎖を切つて猛然怖ろしい勢を以つて怒りだしたやうなものだ。恰も總ての人が饗宴の自然の結果として、心切かに「騒動」を待ちうけてゐたやうに、皆んながそれを歓迎し、それに加はらうとした……皿や杯が八釜しい音を立て轉ぶやら、椅子が引つくり返るやら、壁になるやうな物音がするやら、手が空中に振り上るやら、上着の裾が飛ぶやら、喧嘩は一層烈しくなつて來た。

「遣つけろ！ 遣つけろ！」と今までは私の隣に座つて一番おとなしくしてゐた肴屋が此の時急に狂人のやうに奴鳴りだした。尤もこの男が先程から黙つて頻りに一人酒を呷つてゐたのは事實である。

「引つばたいてやれ！……」

誰を引つばたくのか、何故引つばたくのか、そんな事は彼も考へちやゐない。唯猛烈に奴鳴つてみただけなのだ。

警部補や、道路官吏や、自分の雄辯がこんなに早く終らうとは思はなかつたラツチが一同を鎮めようとした……然も其の努力は無駄であつた。私の隣の肴屋は今度はラツチに喰つてかゝつた。

「彼奴はあの若い女を殺したんだ。嫌やな獨逸人だ、」と拳を振り廻しつゝ肴屋が彼に向いて叫んだ。「巡查を買収してゐながら、此處で大きなことを云つてゐやがる！」

丁度この時給仕が駆けつけた……それから何うなつたか私は知らない。私は大急ぎで帽子を取りたくなつて一生懸命に走つて歸つた！ たゞ覺えてゐるのは怖ろしい物音、それから襯衣の老人の頭髪の上に載つてゐる鎌の食ひかす、部屋の内を飛んだ坊主の帽子、隅の方に小さくなつたウイクトルの蒼ざめた顔、逞ましい手に握られた赤い髯……これが私が持つて歸つた最後の印象である、憐れなるスザンナの爲にシギスムンド・シギスムンドウイッチが斡旋した一記念の饗宴」から持つて歸つた最後

の印象である。

暫く休んだ後、私はフストフを訪ねて其の日見たことをまるで話した。彼は身動きもせず頭を垂れたまゝ、両手を足の下に入れて聞いてみたが、また「あゝ！ 可哀さうな女だ、可哀さうな女だ！」と呟いて、また長椅子に横になつて私の方に背を向けた。

一週間の後には彼はすっかり氣を取り直して以前の様な生活を續けてゐた。私がスザンナの手記を記念にするから呉れと云つたら彼は何の苦情も云はずに直ぐにそれを私に呉れた。

二十八

それから幾年かたつた。私の伯母は死んだ。私は莫斯科を立つてペテルブルグに移つた。フストフもペテルブルグに來た。彼は大藏省に這入つたが、二人は滅多に逢ひもしなければ彼の様子を知ることとも出来なかつた。彼はたゞ普通の世間並の官吏に過ぎなかつた！ 若し彼は今でも生きてゐて結婚しないとすれば、恐らくは彼は今も相變らず彫刻もすれば大工もし、啞鈴も振ひ、相變らず女殺しで、女の友達のアльバムに青い服のナポレオンなど描いて遣つてゐることであらう。私は用事が出來たので莫斯科に行つたことがある。莫斯科で昔の知合ひのラッチの運が悪い方に傾いたと聞いて少なから

ず驚いた。彼の妻は双生兒を生んで露西亞流にプリアチエスラフとウイアチエスラフと云ふ名を付け、たさうだが、火事で家が焼けてしまつた上に彼は役を止めさせられ、なほ悪いことには長男のウイクトルが始終金貸に責められてゐるさうな。莫斯科に逗留してゐる時には友人同志集まつた席で私は偶然スザンナを輕蔑した侮辱的な惡口を耳にした！ 私は運命が亡却の慈悲をさへ拒んだこの不幸な女の記憶を保護するために出來るだけ辯護を試みたが、私の議論は一同に深い印象を與へなかつた。たゞ其の中の一人の若い學生は私の言葉に少々感動してゐた。彼は其の翌日私に詩を寄越して來た。其の詩は忘れてしまつたが、次の四行で結んであつた。

「墓は荒れて冷たく残れども、

死さへ優しい靈の思ひ出を、

つらい世のそしりから救ひ得ず、

花は凋む寂しい墓の上。」

私はこの數行を讀んで知らず／＼瞑想に沈んだ。忽ちスザンナの幻が私の目の前に現はれた。私は

自分の部屋の凍つた窓をふたゝび見た。あの物凄いや雪と暴風の吹き捲くる夜と、あの言葉と、あの戯言を思ひ出した……私には何う考へてみてもスザンナのフストフに對する愛が腑に落ちなかつた、彼に見棄てられたと知るや否や何故あんなに早く、あんなに急に絶望してしまつたのか何うしても飲み込めなかつた。何故彼女は最う暫く待つて彼に手紙を出して辛い眞實を直接愛する人の唇から聞かうとはしなかつたのだらう？ 何故突差に身を踊らして深淵に飛び込んでしまつたのだらう？ 或は彼女が熱烈にフストフを愛してゐたから、自分に對する彼の奉仕と尊敬に少しでも疑問のあることが許せなかつたのかも知れない。或はまた彼女は決してフストフを熱烈に愛してゐたのではなく、たゞ彼に自分の最後の望をつないでゐただけで、それは自分もよく知つてゐたのだが、其の彼でさへ自分の悪口を聞くと直ぐ自分を輕蔑して見棄てたのかと思へばそれが堪えられなかつたのかも知れない。彼女を殺したのは果して何物であるか、傷つけられた自負心か、頼りなき境遇のみじめさか、それとも彼女がまだ早い日の朝に自分も喜んで心を捧げ、彼も深く信じ尊敬してゐた、あの最初の氣高い眞實な心を持つた人の記憶か、それを誰が云ひ得よう？ 私が彼女の唇が、「あの人は來て下さらなかつた！」と呟いてゐると思つてゐた時に、彼女の靈はミハイルの傍に行つて喜んでゐたかも知れないと云ふことを誰が知つてゐよう？ 人生の秘密は偉大である。偉大な秘密の中でもことに戀は最もう

かゞひ知るを得ないものである。——それは兎に角私は今でもあのスザンナの面影を憶ひ浮べると、何時でも彼女が可哀さうで堪まらなくなり、運命を恨みながら私の唇はひとりでに呟く、「不幸な女！不幸な女！」

——(終り)——

大正十一年三月十五日印刷
大正十一年三月二十日發行

曠野のりや

定價壹圓拾錢

不許
複製

譯者	妹尾紹夫
編輯兼發行人	鷺尾浩
印刷者	鈴木角藏
印刷所	東山堂印刷所
發行所	冬夏社

東京市日本橋區本銀町二丁目八番地
東京市小石川區西古川町二十五番地
東京市小石川區西古川町二十五番地
東京市日本橋區本銀町二丁目八番地
 電話本局三一〇二番
 振替東京四五四六番

506

71

終